

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.329

麻生路郎☆主宰



十月號

昭和廿九年七月一日第三海郵便物認可
昭和廿九年十月一日發行第九卷第七號

每月一回一日發行

創刊大正十三年通卷・三百廿九號

川

柳

の

証



十月號目次

(昭和二十九年)

題 字……………麻生 路郎
表 紙……………米田三男之介

思想句の研究……………福田山雨楼……………(四)

独立体川柳点について……………阿達義雄……………(五)

首相に……………麻生路郎……………(三)

踊る阿呆に見る阿呆……………諸 家……………(二)

一の谷(上)……………富士野鞍馬……………(六)

川柳家に「赤」は
いないか……………品川陣居……………(四)

アメリカの川柳人を語る……………(天)

ある美談……………東野大八……………(二)

鯛登々……………安川久留美……………(八)

川柳第二教室……………戸田古方……………(三)

BK川柳の会入賞……………清水白柳子選……………(三)
句発表

川村花菱氏を偲ぶ……………吉田水車……………(九)

★

不朽洞句帖……………麻生路郎……………(三)

川 柳 塔……………麻生路郎選……………(六)

同舟近詠……………諸 家……………(六)

近作柳櫛……………麻生路郎選……………(六)
北川春集選……………(六)

一路集……………吉田水車選……………(元)

「自惚れ」……………浜田久米雄選……………(元)

各地柳壇……………(三)

不朽洞会から……………(五)

柳界展望(其の一)……………(二) 其の二……………(六)

公私雑記……………(五)

本社十月句会

時—十月九日(土)午後六時

處—大阪市天王寺区下寺町二丁目

題—「食卓」路郎選 「世話役」香林選 「養鶏」博也選

柳話

来会歓迎・鉛筆持参

麻生路郎

北川春集

川柳雜誌社句会部

於光明寺

博也選

川柳塔・近作柳櫛・一路集・各地柳壇
の投句に便利で経済的な

川柳雜誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料八円

をおすすめいたします。御利用下さい

高血圧も
サーピナ錠

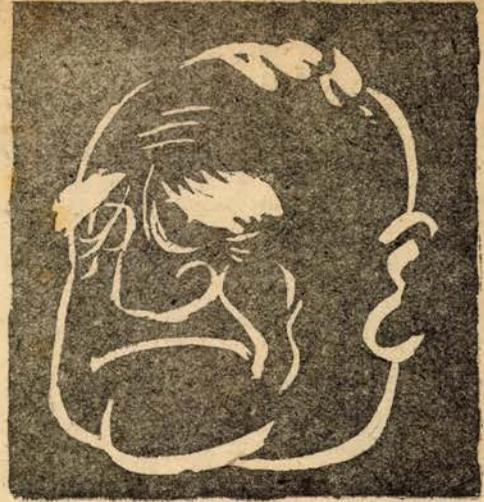
忘れよう!

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠!成分含量も多くてお得です

山之内

大阪名菓
もろかんのり
源氏いっしょ

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話 三三〇九



首相に

麻生路郎

丁路の句に
草に癒て首相の労苦思
やり

と云うのがある。この句が吉田首相を詠んだものか、どうか、その辺のことは判らないが、おそらく敗戦日本を背負うて立つた吉田首相の労苦に同情した作品と見てもいゝだろう。

香林に

招かざる客は首相を休ま

せず

と云うのもある。

首相と云う仕事は誰がやつても労苦の多いことは想像に難くないであろう。殊に敗戦後の国策を樹立し、庶民生活を安定させる放れ業は天井の低い家の中で、槍や薙刀を振り廻わすに等しく誰にでも出来る仕事ではない。それはその道の達人のみがなし得ることである。従つて首相が事を処するのいろ／＼の手段もあろうが、こと／＼に秘密主義でも多くの非難を招来するであらうし、こと／＼にあけツ放しであつても事はならぬのではないかと思われる。そこにある程度のワンマンであることがゆるされる訳である。しかし、いつまでもワンマンがゆるされると思つたら大きな間違いである。その点から云つて、

敗戦直後の混乱時代にはある程度ワンマン振りがゆるされたのであるが、既に曲りなりにも基礎工事が成つた以上はそう／＼いつまでも、ワンマンであることがゆるされる筈がない。

今日、吉田首相に対する庶民の声はゴーゴーとして、その非を難じてとどまるところを知らない。

山雨楼に

ワンマンは詰むまで駒ま

進める氣

があり、豆秋に、

吉田さん三振しても引つ
込まず

の句がある。

これらの句を一川柳家の作品だとして黙殺することは出来ない。これ等の句が、川柳として高く評価されること自体が、庶民の声をよく代弁しているからである。首相たるもの三思三省すべきである。

曾てはマツカーサー天皇と云う言葉が生まれ、マツカーサー去つて、吉田天皇と云う言葉が生まれた。こんなことは誰が云い出したのか知らないが、風の如くにやつて来て庶民の耳の底深く残つていく。これ等の言葉は幾らワンマンであろうとも法の力で抑圧一掃することの出来ないものである。これこそ首相の言葉をかりて云えば流言飛語であるからである。

白水の句に

首相又新装開店するつも

り

と云うのがある。

幾ら大臣のガン首をさし替えて、新装開店したところで、庶民の支持のない店に繁栄の来るのぞみはないことは火を見るよりも明らかである。

こんな時に、私は西園寺公望の存在を思うものである。側近でなく、政敵でなく、公平無私に国家の前途を憂い、首相をひそかにさ

し招いて善処させる一西園寺のいないことを私は悲しむ。

吉田首相の外遊も、吉田首相にすれば、日本の将来を思う至誠からの外遊なのであろうが、庶民の声に、外遊もいゝが、もう帰つてもらいたくないと云う声さえある時、無益の至誠は首相自身にとつても精力の濫費に過ぎないのであるまいか。

私は吉田首相が、あの精力、あのガン張りを今少しく、内蔵したまゝで首相の地位を去つていたら、今ごろは西園寺公望の立場にすべり込んでいたかも知れないと思つと、国家のために、又、吉田首相個人のために惜しまれてならない。私は首相個人には何等の恩怨もない。

拙句に、

さて誰も来ぬと寂しい元

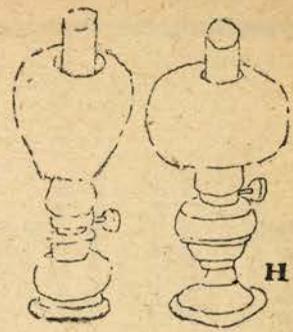
首相

と云うのがある。そうした心境も判らぬことはないが、それを寂しく感じなくなつてこそ、首相も人間として完成されるのである。

不朽句帖

麻生路郎

誰とでも一対一で生きてゆく
一ト駅のとこを優待乗車証
着物をやれば帯が欲しいと
政客のつもりか花輪やりた。



思想句の研究

福田山雨楼

思想句という呼び方、分類の仕方があるかどうかは知らないが、句の中心に思想的背景があつたり思想の裏付けのある場合、それらの句を思想句と呼んでも敢て不当ではないと思う。或る人は作者の人生観、社会観、世界観が出ていない句は、句として価値が低いと云つたが、写生句や人情句が比較的多かつたこれまでの傾向があらためられて、時事吟や思想句の數及びこれに対する論議が増えつつあることは事実である。終戦後社会や国民生活の状態が幾度となく大きな変動に會つていたので、一部にはあきらめ、虚脱、逃避の心理もあるが、大部分の国民は如何にしてよりよき生活を求むべきかについて苦慮し、批判し、思索しつづけている。政治、道徳、経済等に対するレジスタンスの精神が盛り上つている。川柳が社会人生の反映である以上思想句の多いことも亦当然であらう。たまたま本誌三月号で路郎先生が「作家に」

と題して「(前略)私は斯うした作家と句を透して思想の交流を楽しんでいる。いつまでも健在であつて欲しい」とのべていられるのを思い出して、一層思想句への関心を深めているものであるが、最近の本誌川柳塔、近作柳樽を愛誦して特に眼についた若干の句を拾い出して、自分が思想句に対し抱いている感想をのべて見たいと思ふ。

MSA眠る武士道呼び起
MSR犬が尻尾を振る如
カ一边倒の思想に塗りつぶされて
いる吉田内閣の手に依つて成立した。これらの句は成立前に詠まれたものであるが、国民の立場において冷静な判断を下している。戦争を怖れ再軍備を避けようとする国民の平和思想がこの句に共鳴する所以である。

空の青正義の所在信じた
凡九郎
思想家をやめる〜とど
なるジャズ
宏方
理想家を囁つた君が何を
した
弓削平
現代は思想の混乱時代である。一方に理想を尙び正義を愛し思索を樂しむ思想が重んじられている他方では、悪徳の横行、権力の乱用、都会の喧燥等にその傷口を見せる行動主義の思想がはびこり、民主主義と共産主義、自由主義と統制主義、平和論と軍備論等々が相争つて思想的対立をなして帰趨

するところを知らない有様である。これに加えて原子力の発達が世界の思想安定に大きな脅威を加えていることも否定できない。以上のべたところは思想句の内容についてその反映にふれただけであり、思想句の鑑賞検討に至つては甚だ不充分であるが、この一斑を以てしても如何に思想句が複雑で底の深いものがあるかがうかがい知れると思う。底が深いと云うことについては反対に時事川柳は底が浅いと云ふ説もあつて議論の余地が少くないし思想句本来の問題も多いので重要な点を取上げて見たいと思ふ。

先ず第一に考えて見たいのは作者の思想についてである。作者の思想が浅薄で常識程度を出でない場合は、その作品も従つて低俗から救われないうまく云われるところであるが、自分は必ずしもそうは思わない。孔子はあれだけの大思想家であつたが詩人ではなかつた。柳樽の作者達は大した思想の持主でもなかつたが多くの川柳詩をのこした。中には思想句として批判や抵抗をこめて詠つたものも少くない。思想が学問として論議せられる場合は広汎にして高踏深奥なる頭脳の所産が要請されるであらうが、詩人のパツクポイントとしての思想は、思想に敏感であれば要は足るのである。思想を頭の玩弄物とせず胸と腹とを以て対決するとき現代の川柳詩は生れる。

戦後性道徳の低下は著しく道学者たらずとも眉をひそめさすものがあるが、これは性の解放という思想が風びした結果であつて云わば自由思想の歪められた表れでもある。この二句はえん曲にのべているがマヒした性道徳或は性心理の一面を鋭く掘り込んで、強烈な作者の批評精神を汲みとることができる。

葉光
金あればと少年が言う恐
ろしさ
文庫
金儲け
法にさえ触れねばという
金儲け
葉光
これらの句が示すように全く金が仇の世の中である。金で得られることのみ快楽を求めようとする。何でも金で解決をつけようとする。金の価値が激減したインフレからデフレになると今度は深刻な金詰りである。最近の「国際新聞」を見ると、ある有名なアメリカ

香林
没食子
生き
汚職々々日本が負けた事
忘れ
あれほど世間をさわがせた汚職事件も指揮権の発動や国会の圧力で、その検挙は竜頭蛇尾に終り内閣の命とりにもならず漸く社会の関心から遠ざかりつつある。しかしこれに対する痛憤が冷めたわけではなく、国民はこれらの句と共に憂慮の念を濃くしているのである。憂心とレジスタンスの中に堅実な思想が一本通つているのである。

香林
没食子
生き
汚職々々日本が負けた事
忘れ
あれほど世間をさわがせた汚職事件も指揮権の発動や国会の圧力で、その検挙は竜頭蛇尾に終り内閣の命とりにもならず漸く社会の関心から遠ざかりつつある。しかしこれに対する痛憤が冷めたわけではなく、国民はこれらの句と共に憂慮の念を濃くしているのである。憂心とレジスタンスの中に堅実な思想が一本通つているのである。

かつて大阪の川柳界で活躍され後年広島に帰つた大山露斗氏は、一介の職人に過ぎなかつたが幾多の思想句をのこしている。たとえ高遠ではなくとも血肉を通つて流れる思想は人の肺腑を衝くのである。だからと云つて川柳人に学問や思想の興行が不用だと云うのは勿論ない。学問や思想の裏付けは深いほど結構ではあるが、思想が深く鋭く現実を迫つていなくなつたならば、そして独自の形象のうちに表現されていなくなつたならば、川柳作品として人を動かす力が欠くることを指摘したのである。

次は川柳と思想宣伝の問題である。これは何も川柳に限つたことではなく文学全体について云えるのであるが、特に思想句の場合は問題が切実である。商品の宣伝(説込み)川柳などは論外とするも、速く狂句時代の勸善懲惡の句、階級斗争華やかなりし頃のイデオロギーを露骨に詠つた句など、川柳が宣伝に利用された例は古今を通じて絶ゆるところがない。尤も宣伝する方の立場では文学をよりよく生かす途であるとしてそれ相当の理論を掲げているが、御用文学、従属文学が邪道であることには変りはない。このことは道歌と称する短歌が芸術的でない例を見れば一番よくわかる。芭蕉の奥の細道にある「あらたふ

と若葉青葉の日の光」は日光で作つた句で、そのモチーフは自然美の詠嘆ではなく東照宮への讃歌であると云われているが、そう受取るとこの句は歌句である。近代俳句でも生活派と称するものの中にはイデオロギーを詠つた句が少なくないが、川柳に比してさすがに微温的である。戦争中は文学報国などと云う言葉が飛出して、小説まで戦意昂揚の一役を買つたものであるが、戦後は様相がガラリと一

変し肉体派、不倫物、人間探求派から然らずんば容共派などが入乱れて文壇をにぎやわし、共産勢力の増大と共に思想を背負つた文学が少くない。左傾派の斗将藏原惟人氏は岩波文学講座「文学と思想」の中で「真に新しく高い芸術文学——新しい民主主義の文学、社会主義リアリズムの文学は、すでにソ連、新中国などの作家たちによつて、また資本主義諸国の先進的な作家たちによつてつくられた。それはただたんにこの現実を正しく客観的に反映し、その将来の発展を見通す文学であるだけでなく、この現実の变革に積極的に参加し、平和と自由と独立のためたまたかい、その精神によつて人間と社会を教育し、改造する文学でなければならぬ」とのべているが、先驅的、革命的な思想の宣伝武器として文学を抱え込むのはおさまりの常套手段である。文学

者が時の勢力や権力に利用され時代の風潮に迎合する安易な宿命の下におかれています以上、これもまた止むを得ないことかも知れぬが、川柳人はそうであつてはならぬ、一寸の虫にも五分の魂、富貴も淫する能わず、威武も屈する能わざるの厳乎たる庶民精神をどこまでも失つてはならぬ。川柳が思想のかけらとして踊らされることをあくまでも戒心せねばならぬと思う。

第三は思想句と時事吟との関連についてである。時事川柳に関する論議はすでに用済した感があるが、思想句即時事川柳ではないし思想句の幅はより広いものであることを忘れてはならない。大正の末期から昭和初年にかけて革新川柳の盛んな頃は、傾向主義、生命主義、未知探求等の旗印を掲げて思想や真理の追求に懸命であつたし、近頃新しい詩川柳を目ざして進む一派は、時事諷刺より一歩前進した思想句をねらつて余念がない。いずれもが抽象に走り過ぎて具象性に欠けるところがあるが、川柳の振幅を思ふす句も少くない。時事吟の多くは勿論思想句であるが、時事吟は得てして事件やニュースに即きすぎ、発表の時期が遅れると魅力を失うと云う欠陥があるため、現在のように投句して雑誌に発表になるまでに一ヶ月以上を要する始末では、作句意欲

がにぶるのも当然であらう。その点新聞柳壇はあつたえ向であるが、スペースが少いのと購読紙の関係等があつて川柳からあまり重んじられていない。勢い思想句の力点は時事諷刺を避けて人情風俗の方へ移つてゆく傾向があるのではなからうか。この点迷亭氏がかつてもくろんでいられたように川柳新聞の刊行が実現すれば様子はまた著しく変わるであらう。しかしここで考えたいのは川柳の多様性と云うことである。種々雑多の人間像、社会像をあらゆる視野角度から、おかしみの诗情の中に捉える十七音字の手すさびこそは、この道の経験者が忘れることのできない郷愁でなくて何であらう。

時事吟を広め高めようとする主張は正しいのであるが、これにあまりの期待をかけ時事吟一辺倒に傾くことは策を得たものではないと思ふ。時事吟が川柳の多様性の中を先駆してこそ益々その光彩を添ゆるであらう。

。或る人は詩性川柳派を目して「文学青年的感傷と自慰、強烈な自我への執着、痴呆と擬い唯美的狂燥等が、この高度の社会詩を片々たる個人的独白の私詩に転落せしめたのである」と酷評しているが、それは欠陥のみを責めるものであつて彼等の真摯な創作意欲は尊重しなければならぬ。ただ詩性川柳派が注意すべき点は我々私尊の考えから他派の攻撃に急なることであつて、今少しく自重して川柳の本質を検討し思想句本来の面目を發揮したいものである。自分がかつて阿彌三氏自選の十数句をホトトギス派の某俳人に見せたところ、一見して「これは全く俳句ですね」と云つた。その言葉が妥当であつたかどうかはわからぬが、新しい分野を開拓しようとするものには以て他山の石とすべきであらう。作品を試みに詩人に見せて批評を求めるとも徒爾ではない。或る詩人は「いかに労働者の詩が階級的意義を帯びているにしても、それが一定の文学的評價にたえ得ないならば、その文学的発展はあり得ない。文学作品として完成することなしには、あたらしい詩精神の形式も、従来の詩的価値の革新も、とうてい遂行できなないとおもう」とのべているが、思想句を志すものにとつて示唆のある言葉ではなからうか。



池田市 戸田古方

こんな螢だつたのかとつまみ上げ

どこやらでかねがなりますぼんのころ

尼崎市 水谷鮎美

生き別れブツキラボウも帽子振り

代筆はきれいな嘘を書いてやり

妻の代筆をして半日暮れる

闘魚の詩おどめごろのたくましき

大阪市 市場浚食子

拾ひ屋が西瓜の蠅をつれ歩き

大器晩成の夫を信じまだ間借り

横浜市 福田山雨楼

蜘蛛の習性を知りおかしくなりぬ

人権を持ち出してくるストはやり

デフレから親子の心とぎれ勝ち

ねたままの徒然草を書くなやみ

散歩位できる身体になつた夢

あとしりをせわするつまにてをあわす

大阪の人出おどろく東京ツ子

値上げしておいてピースの賣れぬ愚痴

ホノル、市内藤草一郎

その気では有つたよ永いことじらし

それからの魚心は桁がはね上り

性格は合わぬが三人目が生れ

別れたと知れりやひいきが皆戻り

塗れば嫉き塗らねばすぐに傍見され

現実はきびし婦唱夫隨なり

米子市 三嶋美笑

出迎に参りますのには世辞か

人間も草も一と降り待つている

子と遊ぶ将棋は面倒くさくなり

東京都 藤本満年

むつくけき腕でつかんだ大ジヨツキ

炎天下威儀を正してサンドマン

布施市 吉田水車

そこにあるだけですデパートそつ気なし

納涼映画ブヨブヨと写るなり

デフレデフレ西に東に生きんとす

鳥取市 大西八歩

幸福は遠くから見る祭の灯

風鈴も鳴らず株値もこげついで

盃蘭盆会暑きが中に秋の風

大阪市 須崎豆秋

哀れなる男と思うはしご酒

灯を消して虫をきいてる利休さま

朝つから呑める身分をさみしがり

大阪市 正本水客

キャンブファイヤに青春のありつたけ

底にたまつた牛乳を勿体なしと見る

多数決に超然として反対し

子の留守に子供の火花つけてみる

扇風機の向き変える度胸を持ちあわせ

イヤリングと云うには遠いものを付け

全国優勝高校野球

場内一周みちがえるように選手照れ

池田市 黒川紫香

代筆でかいた言葉のまゝ届き

信心の瞳にロソクの花がゆれず

旅愁とはたつた一人で降りた駅

松の風瀬戸内海の景になり

挨拶などどうでもよしビール抜く

銀行の門燈やもりが来る暑さ

お風呂から戻ればなめくじ一つ這い

七輪を並べ長屋の暮となり

大阪市 丸尾潮花

体温器はさみ見舞の札を書き

制服で喫うている娘と呑んでる娘

扇雀のサインがうられし舞扇

心まで買えぬお金の工面する

病やよろしく留守居たのまれる

恐しい恋だ夫も子も捨てて

表札は名刺往診まごつかせ

茶を呑んだだけの由縁りへ借りに来る

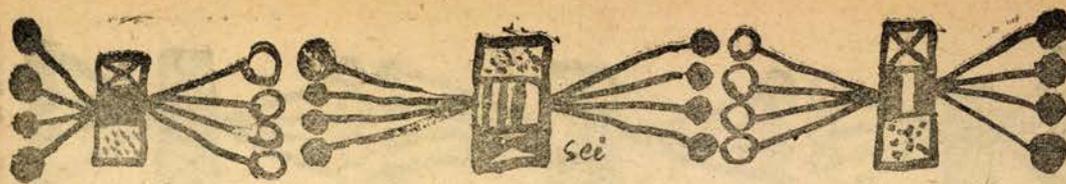
大阪市 北川春巢

芸がないと思えど中元たばこにし

蚊帳を買う予算ビールにまたとられ

人前の二人は標準語で話し

立読の眼鏡片耳だけ外し



図書館で居眠りしてたとは言わず
滝の茶屋天気続きをこぼすなり

奈良県 尾崎 方正

あはれさは小皺の顔にイヤリンダ
貯めてみればまた云ふ事の変る君

年の勢にされて薬も呉れません

岡山県 浜田 久米雄

易断のとおり動いて金を借り
ペン先を替え言訳の手紙書く

古老まだ螢光灯へなじまぬ気
百円のことで年寄むきになり

岡山県 逸見 灯竿

嵐など知らない風の栗のいが
ほれられてちどうろたえる年をとり

もみがらの中の玉子の行儀よく
二の腕へ蚊をとまらせるひまなこ

大阪市 清水 白柳子

せんど待たしてこれから会議です
女給がハイヤ急ぐのがてくり

町工場軍備へいそぐ音をたて
恋を恋してオードリー型に刈り

大阪市 福田 妄夢

宝塚でみたされぬものあり満はたち
フラッシュを待たして女唇をなめ

何をか言わん汚職に幕が降り

出雲市 尼 緑之助

大阪府 水谷 竹莊

無理をせず長生きしてと便り来る
まだ何かないかと晩酌酔うていす

博多にて

おみやげに聞いてと本場博多ぶし
有馬温泉

滝へ来るアベックみんなカメラ持ち
外遊はフラダンスだけ見て帰る

兵庫縣 小沢 史葉

黄麥米過剰を整理する吐か
目ざとくも女房何時でも目を開ける

尼崎市 小林 文月

都会では吸殻でさえ金になり
医師夫人というが案外やつれて居

妹を待つ気で妻の友を待ち
愛人の頭かく癖それも好き

福岡市 山根 白星

血圧を気にして手形割りに来る
肋骨にさわるわびしいふどころ手

鏡台を並べてみんな不倅せ
面影が似ててビールを酌ぎこぼし

こめかみは激怒していた安定所
放射能雨かアハ、と朝が出る

笑わない娘となつて島を逃げ
慌てゝる証拠女の下駄を履き

大阪府 富岡 淡舟

人見知りせぬ子キャラメル貰うて来る

お父さんの留守の植木へ水をやり

奈良県 飯降 白香

夏雲もいゝなどおもうひるねおき

岡山県 西辻 竹青

遺稿録おき所なく持ちあるき
人前もおめすこゝよと手を上げる

米米米あゝ食う事の忘れざる
台風五号又何人か死んでゆき

岡山県 丸山 弓削平

神様に召されます子の美しき
水すまし其処の雲まで流れて見

直原 七面山

きつかけを興えず淑女本を出し
片意地を買われて交渉委員長

恋二つ持つて忙しい年の暮
扇風機を止めて鹹首を言い渡し

もうひとりで寝ます子供に育つてた
六十の恋へ親族会議もめ

モク拾いにも夢あり遠き初恋の
浮浪兒の我が子に欲しい太りよう

宇都部市 長野 井蛙

汚職せぬことを代議士自慢にし
裸になれば喰える女がうらめしい

釣革へ席があるのに金時計
世の罪にして一向に恥とせず

布施市 森下 愛論

ライバルの病気で一寸気をゆるし
スペシャルルーム気になる悲鳴上げ



大阪市 西 森 花 村

受けとらな通すものかごら配り

八月も同じ値で賣る風邪薬

腹いせに妻おじいちゃん〜

さて俺にどうしろと言う白晝かな

首振つて〜小唄の声が出る

鳥取市 河 村 日 満

吉田さん辞めてご主婦も学生も

昔ならもう暗殺をされる頃

五拾円也交際費出し惜しみ

通信簿意地がないにも程があり

邪魔臭いキツスなどはあと廻し

何んのその苦しまぎれの魚釣りさ

宿毛市 姫 田 夕 鐘

上布着て行けば女が値踏する

ボーナスをチントンシヤンで吞んじまい

ふと聴けば看護婦さんの郷土節

岡山市 福 島 鉄 兒

フアツションショウ別な世界を見て戻り

逢引へ下痢をしているとも云えず

大阪市 福 本 翫 骨

吸殺の無神論者へまだけぶり

大阪市 榎 南 夏 六

叱られているのにうるさい扇風機

扇風機どうにもならぬ手形書く

大阪市 西 い わ を

もてたこと妻へ話して笑われた

デパートで涼まんなの晝の客

下つ端の汚職電蓄やつと買

集金に無闇に笑う女が来

岡山市 服 部 十 九 平

見る方の阿呆が多いのにあきれ

くすぶつたカンス爐端で欲しがらせ

田の中で吞ますに蓄める友は老け

兵庫県 若 林 草 右

イロハ順で死ねばこんどは僕の番

名門の他に褒めよのない野球

大阪市 足 立 春 雄

バイトサロン見た様な娘に迎えられ

商賣に下げた頭がはげて居た

右願左ベン俺は一体どこに居る

熊本県 有 働 芳 仙

黄麥米食つてたことにされた僕

ビール等冷えてはいない靴を脱ぐ

岡山市 延 永 忠 美

水晶婚かくて青春消えにけり

結婚記念日娘にちよつとてれくさし

大阪市 地 俱 山 風 楼

さびしさは吸殺茶椀に消した音

フランスにあこがれているペンネーム

税務署はんにも妻は風送る

御機嫌は子供もわしに似よつたよ

下関市 石 川 侃 流 洞

大工には素直に動く鋸であり

打水にも気を使う路地の小料理屋

蔭口を似たもの夫婦の名で呼ばれ

大阪市 安 岡 珊 枝 郎

往年の長者番附壁に貼り

他人ながらあの老舗がご気に懸り

此儘に寝込みやしないかと思

広島県 山 田 季 賛

恋人のぎつちよを知つた喫茶店

新薬が僕の命を長びかせ

レントゲン洗濯板を派手に操り

大阪市 山 本 葉 光

理解ある課長も同じ夜学の出

母に似た運命姉につきまとい

親類のつき合すこし喋り過ぎ

毒味して呉れど女を嫌がらせ

倉敷市 木 村 千 容

洗濯の水波んでやるだけの仲

下僕かのように手をとり杖をとり

怒るかと思えば眉も動かさず

唯我独尊古いものさし当はめる

倉敷市 田 垣 方 大

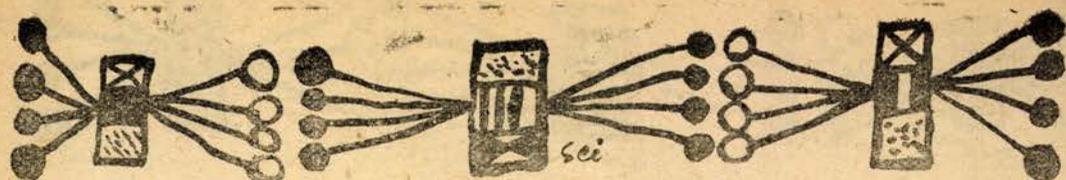
不作法は人の手紙を黙殺し

しやべらない方がチップを置いてゆき

子がみんな寝て家計簿を見せられる

石川県 那 谷 光 郎

ヘッドライト恋の涼みを割つて過ぎ



どんづまり家宝が税になつて消え

大阪市 木村 水堂

肩書のない犯罪はすぐあがり

汚職する度胸もなく子沢山

イヤリング昭和生れの相手せず

高槻市 福田 丁路

特飲の意味が解らず勤める気

温泉の宿で眠り続けて怪しまれ

愛恋の自由到老の目しばたき

とかくこの世は聞くを見るどが違い過ぎ

倉敷市 水谷 谷水

紅一点拍手もしなきや臨も見ず

体裁のよいこと言うも中年か

希望未だあり獄房で聖書繰る

製材所出来たら二号越しちやつた

生活の糧とも知らずやにさがり

おばさんじやないわいな男の子

混血児のつぎに日本男子生み

失恋の果の諾とは知らなんだ

二号にはかなわぬまでも化粧して

底しれぬ淋しさ退職金で飲み

細つそりとしてゝも女抜け目なし

倉敷市 相原 一善

別荘をほめて日曜は借るつもり

金借りて見れば光陰矢のごとし

出戻りかなるほどツンとすまじどり

岡山県 田村 藤波

泣けるだけ泣けとは少し皮肉なり

草刈りの刈りためろうた百合の花

岡山県 岡田 夜潮

剃刀のように切れても困るなり

おもむろに所見を述べてデョッキ持ち

入院に飽いて釣竿持ち込ませ

よし来たど怒る体制整える

裏口をどんと締めればざるが落ち

枕木となつて一生終らんか

税金が小さい望までつぶし

社長室秘書の好みの花になり

岡山県 坂井 三葉

婆ちやんを雌鶏までがつゝきに來

初卵嫁ぎ先まで持つてゆき

ざり〜に來てはきちんを判を押し

拜聴をする恰好も板につき

情熱を燃やす日もありイヤリング

酔わしてね今日は貴方の誕生日

年来の夢捨てがたく〜

御苦労でしたとは若い課長から

斗病へ入道雲はきつすぎる

貧しければあゝそれでよし冷奴

夏やせをバーのマダムに羨まれ

妓のはべる席ならワンマンとは見えす

もらい子を育てる乳房しなび過ぎ

岡山県 本田 惠二朗

生涯の吉日伊豆の空は晴れ

大阪市 眞鍋 一瓢

適材と言われ喋らぬ役につき

勤嚴な夫へ無駄な肉体美

お女将さんになつても思わせ振り残し

もつともな話聞いどりや借りられす

ミナミの灯夫ある身と言わさぬ灯

特口から浴衣の二号が顔を出し

世を捨てた尼僧と見えぬ片えくぼ

宇蘭盆会無敵皇軍のまゝ飾る

大阪府 永田 六龍子

眼を開けりや世界が変る剃髮式

容貌怪異それだけ記憶に残る顔

夢の中をどこ樹海を飽かず見る

病窓の働く音をふと愛す

星の名も知らず散步の虚をつかれ

洋服を終生着すに通す母

いばら道カメラも大事子も大事

一人ぐらいは迷子にしそうな子供連れ

子供連れ淋しい嘘でなだめてる

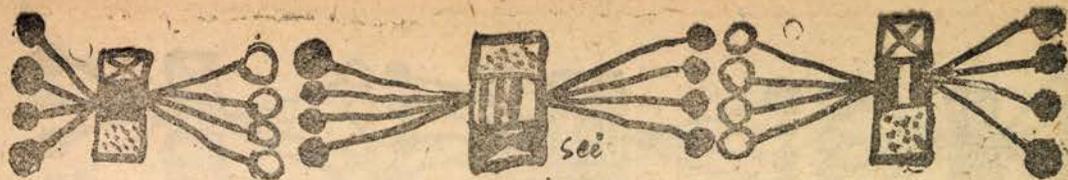
吸殻の山一行の詩に生きん

大阪府 飯島 二桂

大阪府 尾野 おさむ

大阪府 兒山 紫郎

大阪府 飯島 二桂



大阪府 岩島雄步
扇風機から遠く離れて初対面

大阪市 後藤梅志

戦争のあとの虫屋は品がおち

正直に死ぬものぐらいあつてよし

大阪府 小池しげお

部長と課長へ御中元の候となり

ジグザグに歩くバタ屋の影法師

幹事の浴衣一つ残して風呂へ行き

うぶ声にひまわりサットこつちむき

まあ〜と金を置いとく下心
川西市 竹内圭三

親のすねかじり足りない子の手紙

長女出生

初孫を抱いてやりたい手があまり

お勤めに出てましたのと濃いルージュ

倉敷市 松村万古

犬が吠え赤子が泣いて朝になり

倉敷市 藤井春日

呑平の本望らしい死につぶり

ヘツパーンそれもよかろう夏ちやもの

飲むための日傭稼業とは隣れ
大阪市 木口賀峰

忙しいのがパチンコ屋

支那服の僕をみつけた大掃除

紙片みな大事に仕舞う大掃除

愛人になれと気軽う言うてくれ

官廳へ住所を問えばことわれ

岡山市 岡本緑風子

雷の様に怒つてけろりとし

逢引が気になり夜釣釣つていず
暗がりへこんな強うなる女

岡山市 津田麦太郎

パチンコも一軒出来た新市制

ちやつと来て女房焜爐を風へ向け

尻餅をついて老婆バスを降り

米子市 小西雄々

仲人もやつぱり借りてきた衣裳

三枚目愚痴をエキストラに話し

市場籠鯛の頭は派手に見せ

岡山市 浜野奇童

盆栽へ寄る年波の争えず

御返事が欲しい子供の見舞状

吹田市 橋本幸男

はころびているのではない海水着

書道部へ入るやもめの気楽さよ

堺市 高崎雄声

交通巡查舞の素養もありそうな

許す気の女ボートへためらわず

金魚でも飼えと雨漏り冷やかされ

心にもない賞め方が気にいられ
大阪市 吾郷玲人

イヤリング・ネックレスのと派手な顔

ハツキリと愛人金の事を云い

乳呑児を母に托してイヤリング

愛人の酒は唇濡らすだけ

大阪市 若本多久志

又かいなど大阪城を案内し

マッチつけてくれる手つきがあらそえす

トイレト男も一寸くしをいれ
封切をかかさずに観て二号なり
打水も小唄になるとなまめかし

岡山市 永松東岸子

親類と他人に通夜の席別れ

母の脊をたたけば骨にすぐ響き

首切られた様に玉葱庭に落ち

肥車ふと郷愁に誘はれる

倉敷市 野田素身郎

帰える汽車もうなくなつた長いキス

昔よくいぢめた奴に手術うけ

養子ます台所から改善し

大阪市 西川恵風

正直なたちで仲人ほかどらす

女事務まいて立飲屋へ這り

子の手前たゞお帰りと云つただけ

倉敷市 安原斜木

値切らねば損首吊の色が褪せ

年頃へ廃業したい親の座を



毛織物 既製服 製造卸商

株式会社 大坂商店

大阪市東区糸屋町二丁目二
電話東①一七四五番



ある美談

東野大八

さる八月二十一日ハルハ河に記念碑が建てられた、という外電を眼にして、ひとよの感慨に浸つた。

ハルハ河というのは、若い人にはなじみがないだろうが、満洲北辺蒙古につどくあたりで、ノモンハン事件の主戦場だつた。昭和十四年のことだから、もう十五年も昔になる。

ソ満国境から七キロも侵入してきたというソ連軍に対し、関東軍は猛烈な反撃に出て、一望果しなき草原の空陸で、文字通りの死闘を展開した。草葉大尉の戦記「ノ口高地」などは、その激烈な戦いの様相を綴つたもので有名だ。私がこの戦争に従軍したときは、ソ連軍をハルハ河の向うに「まず撃退した時期に當つていた。同年六月だつたか」とにかくこの従軍は、数次の私が体験した従軍行のなかで最も快的なものだつた。快

め、特に許可してくれたいもの)この一行の給与は大したもの、ピル、ウイスキーをはじめ甘味品や食糧が山の如しで航空食に準じていた。たつた十人に四台のニツサンのダブルがつけられ、毛布も、フカフカしたのが一人当六枚もあつた。戦場視察にしては水準以上の大名旅行だ。この一行のうち一番食いしんぼうで行儀が悪かつたのが、アメリカさんであつた。ピールのラツバ飲みが進行中の車上でものべつづけられ、その空びんが近くでタコつぽを掘つてゐる日本軍兵士の鼻先にとんだりする。酔つばらうと、所かまわず歌をうたう、どなる始末。それ

に思わしい死というものがなければ、雄大なスケールを持つ一大レクレエーションといえよう。従軍は、外人記者団九名と一緒にだつた。米(T.P.A.P)英(ロイター)仏(A.F.P)独(D.N.B)をはじめ伊(露(満洲国露字新聞)西といつたところで、日本人は私一人だつた。(この参加には松村秀逸少佐(後の大本営陸軍報道部長)が私と彼が瓜二つだ

というところで至極じつ懇だつた。特に許可してくれたいもの)この一行の給与は大したもの、ピル、ウイスキーをはじめ甘味品や食糧が山の如しで航空食に準じていた。たつた十人に四台のニツサンのダブルがつけられ、毛布も、フカフカしたのが一人当六枚もあつた。戦場視察にしては水準以上の大名旅行だ。この一行のうち一番食いしんぼうで行儀が悪かつたのが、アメリカさんであつた。ピールのラツバ飲みが進行中の車上でものべつづけられ、その空びんが近くでタコつぽを掘つてゐる日本軍兵士の鼻先にとんだりする。酔つばらうと、所かまわず歌をうたう、どなる始末。それ

日は清教徒みたい、パンだけだつた。その犯人は君だつたのか」
とあきれていたが、叱りはしなかつた。

さてこうした従軍行の某日、私は宿舎の大暮から夜半這い出した。便意を催したためである。すると近くの幕舎で、数名の兵隊がうごめいている。近づいてみると、それは屍室にしろえた曝舎だつた。嚴重な統管の底に、国旗を顔にかけた一個の亡骸が横たわつてゐる。何か記事になりそうなき配に、私は近くにゐる一人に声をかけてみた。若いその伍長はつぎのように語つた。

「私の分隊の最初の犠牲者です。勇敢で頭のいい名親の手で、大隊でもおそらく随一でした。しよう。戦車二台を片付けて三つ目の標的規正中やられたのですが、射たれても彼は眼鏡から顔を引かなかつた。新聞に書いてやつて下さい、その働きはこゝにゐる者は一人残らず知つています」

私はうなずいた。記事がなければお手盛の陣中美談でお茶を濁すのは、当時の記者連の常手口だが、この曝舎だけは深い哀愁と迫力があつた。あゝ、吉田親の手の最後」そんな風にリードをつけた原稿を私は、ノモンハン名

物の凄じい蚊に食われながら書いた。この兵隊が、なんと吉田茂現総理大臣の息子さんだつたことを相模原陸軍病院の図書室で、私は知つた。勿論戦後である。「隻手に生きる」という本であつた。詳しくは覚えてないが、東京近郊の駅で、人品卑しからぬ老紳士が、車中に彼をたずね、あたりの戦友たちに会釈しておりいつた、元外交官の吉田茂という人だつた。とたゞそれだけが書いてあつた。まぎれもなくその人の息子こそハルハ河畔のあの暗い壕内で寄せ書

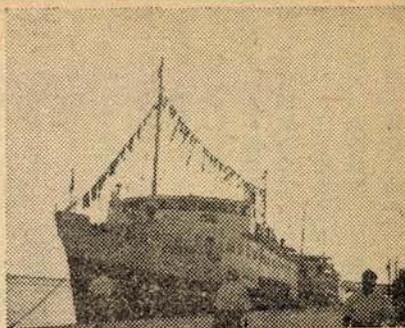
の日の丸を顔に掛けていた遺骸にちがいない。
今日吉田さんの人氣は御承知の通りである。私はこの人の顔をみただけでも、ツワリみたいにかかす国民の一人だが、吉田総理もやはり一人の息子を戦争で亡くしてゐるのである。この親としての悲しみや憤りが、一体どこまでのもしか、以来この人に憤まん募るたびに私は小首をひねるのである。

再軍備と自由党、戦力と日本その説き語るたびに心の底のそこにはどんな感慨があるのか、私が知りたいのはその吉田さんの胸のうちである。

とにかくハルハ河に記念碑の建つというニュースに、私と別に吉田さんは果してどんな感慨にとらわてゐるだろうか。

踊る阿呆に見る阿呆

阿波踊見物と鳴門観潮吟行



特設船丸く丸中島之君振影

昭和廿九年
八月十四日
の正午！
大阪天保山
の棧橋へ當
り、四波舟が
阿波踊見物
の一行廿五
名を見送り
に来た。そ
の手には川
柳雜誌社の
新聞の社旗
が翻つてい
た(編輯局)

午後一時半天保山棧橋を出帆、一路友ヶ島までは無事であつたが、どこか遠方を過ぎた颯風の余波とかで、外海へ出ると千屯余の桜丸を目掛けて支海あたりに見る様な大きなうねりが襲いかかり、船は前後左右に揺れだした。船中大狼狽、ビールを抱えて逃げ出すものあり、柱に獅噛ついているものもあり、船室はがら空き、何れも甲板に出てしまつた。かくして六時五十分小松島着。

うな飲みつぶり。路郎、杏園両先生も引張り上げて来る。淡路島の南端を廻る迄は涼風と平穏とビールとで怪気焰万丈、当るべからずであつたが、さあそれからが大変、山のような大うねりが次々と襲撃、山上から奈落へ突き落されるような大上下動、それでもまだ負け惜しみの連中もあつたが、転がる者、椅子から振り落される者

島棧橋へ到着、バスへ分乗一路徳島市へドライブする。大阪にも無い立派な舗装道路、両側の稲田から吹く風は清く涼しく、月は旧も十四日のまん丸、快適のドライブ半時の後、徳島駅前へ着、市内はまさに充奮の埒塙、風尙明るき照明と人の渦、渦。(河村瑞川)

用波にガブリを喰つた船は大きく揺れた。私は椅子もろとも一間余り吹き飛ばされてしまつた。勿論酒の機嫌で足も浮いていたからたまらない。陽のあたりぬ場所で大らかな折箱の飯を二箸三箸喰いかけている上へまともに私の大きな尻が落ちたから、折はみじんに砕けて、私の尻は飯だらけ、おまけに梅干があつたからズボンに忽ち日章旗が出来た。一同どつと大笑い。彼のおつさん仲々おさまらない、怖い顔をしてうんともすんとも云わず、私を睨みつけている。私は平身低頭してさんぐ詫言を入れながら、これは明かに不可抗力や、そんな怖い顔するな謝まつているやないかと云いたいところだが、元来私は気のあかんちで云いたいことをよう云わん性分、たゞす

一生に一度は見えておくものと人の云うのに引かれ八月十四日の午後一時阿波踊り見物の特設船サクラ丸に乗る。路郎先生、南画の杏園先生、生々庵夫妻、迷路、一哲夫妻かく申す瑞川夫婦、三等か二等か判らぬような船室に入る。小松島から出迎いに来た踊連中、船内狭しとおどり廻る。徳島へ着かぬ先から気が浮き、生々庵、一哲等と船室から飛び出し一等サロンを占拠、ビール、一月もビールを飲まないよ

或る上戸の如きは転がつてもビール瓶を離さない者、全くの大修羅場を現出、阿鼻叫喚、遂に気焰もどこえやら、テスリにつかまり、四道いになつて船室へ退散、ゲロ、ウーン、約小半時と云うもの生きたる心地なしの有様。波静まりたる後も、迎い酒などとおくびにもしやれるものなし。それでも命だけは助かつて六時小松

にゴザと毛布を敷き詰めた一団に占拠され、車座になつてビールの泡に気焰をあげていた。その隣りの陽のあたる場所へ私等のグループ四人が折畳式の椅子をヤミで三百円を二百円に値切つて、それも三脚。あとの一人は鎗綱を繋ぐところへ腰をおろしてちよね、やりはじめる。淡路を過ぎた頃浪が激しくなつて来た。突如大きな土

んまへん、の一点張り。そのおつさんの連れの男が、それと察して、そら不可抗力や、かんにしたり、と云うてくれたので、やつと不承不精に納まつた。それからしばらくすると、その女の連中が妙な顔をすればじめた。突然一人が八百屋を出すと待つてましたとばかり八百屋をつぐもの四五人。件のおつさんの嫁は



踊り見物、路神先生

三田芳三

阿波踊



木村吉郎画伯がく 裁所ま踊る

んらしいのも吐き出した。おつさん頻りに背中をさすつていたが、今度はそのおつさんも「げえ〜」云い出したので、私はこの時とばかり、おつさんの背中を撫でて、やると「すんまへん〜」と云うてくれた。ところが今度は私がとろ〜伝染してゲエ〜やり出したので、それがおかしいと云うて他のものが笑う。こちらは苦しいので笑いごとではなかつた。

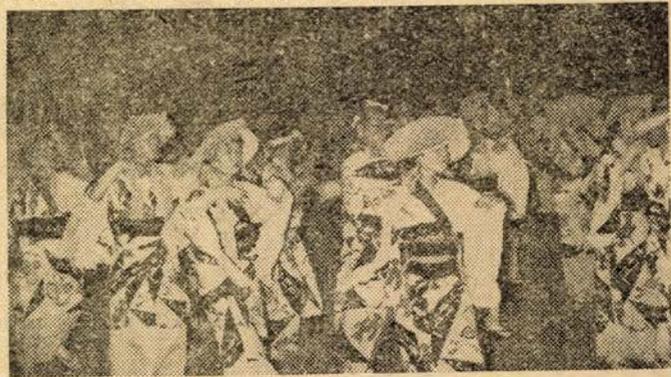
やがて小松島が見える頃、風も風いだし浪も静かになった。今迄鳴りを静めていた踊り子の一団が三味や太鼓に浮かれ出した。船内は再び活気づいて来た。船が岸壁に着いて夕闇迫る頃初めて件のおつさんの白い歯を見ることが出来た。――船中にて――(松江梅里)

徳島駅では出迎えの徳大医学部教授の飯田博士の御案内で駅内ピヤホールに小憩。八時愈々待望の

阿波踊り見物にとりかゝつた。これより先徳島市中は灯の海、人の渦であつた。踊連の通過する縦横の道路は警官が汗みづくで整理する有様、繩張りも物々しい。吾々一行二十余名は互いに離れじと入波を分けて行く。踊り連は高張り提灯(名前入りの)を前後に立て、夜に入るや陸続として各町から市内眉山々麓の参加旗贈呈所へ向う。そこで一わたり踊りま

くつて市中へ出発する訳だが勿論こゝへ来る途中も散々踊つて来た形跡がある。徳島市中心部に南北三つの大通りがあるがこれが徳島駅前から眉山という山手へ繞きその中間にある一番町、八百屋町、東新町、東大工町、銀座、籠屋町を縦横に踊り連中が通過する。新聞社やアマチュアのフラッシュがあちこちでパツ〜と尖光を発する。見る方も汗みづくである。茲に氣持の良いのは、踊つてる連中が腹の底から嬉しそうなことで吾々見物に色々派手な踊りを紹介する。提灯を持つて居るのや三味線方まで踊りの中へ割込んで来る。高張り提灯を持つたのまでが踊る。子供ばかりの一団もあつて仲々愛嬌がある。路郎先生は余程これがお気に召した様で靴履きの浴衣掛へ丁

度背中のまん中へ団扇を差込んで見物の肩越しに覗いて居られる。子供連は人道の中へ出て輪を作り、男女一組三十名ばかりが正直に踊つて呉れた。女の子は手振りも鮮かに良く揃つてゆくが、男の子の方にはズボラなものもいて大分疲れて居ると見え、いゝ加減なことをやつている。阿波の人は皆この阿波踊をやるそらだが、今日踊りに出た団体は何れも達人らしく、陸合連とか天狗連とか色氣連い連という珍妙な連中もあり、総てが練達堪能な手振り足振りをやる。足の方は二拍子で爪先を上手



阿波踊の状況 好美弘撮影

に使い、三味太鼓は急調子で囃すから、寸時も踊りは休む間がなく、余程疲れるだらうが、踊りが元来軽妙なので体の方には無理が来ないらしく突に見ていて愉快になる。これは大阪や京都から見に来る管だという氣持になる。徳大工学部の土木部の若い人達無論これは学生であらうが突に器用なものだ。女は鳥追笠を被つて白い木綿で腕の所を手首まで巻いたのが本式らしく充分色氣を感じる。取締りの方も念が入り、スビーカーで『只今拘摸が大勢入込んだという情報があつたからどうぞ見物の皆様懐中物をご用心』などと放送する。徳島市は仲々近代式の道路で人道もゆつくりしたものが、当夜卅万人にもなろうかという人出では至る所千日前の様な鬱閉氣だから、皆んな懐ろなぞはお留守になつてゐるに違いない。田舎は親切なものだと茲でも感じ方。斯様に夜の更くるに連れて踊り方も増え人出も増して行くのだが吾々も約二時間人波を行くのだが足が棒になつた。風聞の疲れもあるので、一行は十時のバスで船へ帰つたが、バスは窓から淋しくなつてゆく街道を見て居ると三味線を担いで二三人連れでお帰りになる早い組もあつた。

八月十五日(後藤梅志)

詩の国、夢の国、阿波の徳島は

同時に踊る国でもある。その踊りを私は今年初めて見ることが出来た。唄も踊もそれ自体は単調な繰返しに過ぎないが、扮装と雰囲気とその乱痴気騒ぎは本当にすばらしい。高張り提灯先頭に何々連と筆太に書いた提灯片手に揃いの浴衣、豆絞りの手拭の頬かむりもあれば編笠もある。老幼男女、芋を洗う様な雑沓の中を後から〜踊る連中は一寸の間も絶える間もなく踊り狂う粋な妓さん連から素人娘連、髭のおつさんから腰の曲つた姿さんまで見栄も体裁も忘れ、地位も階級もなぐり捨てて、一切合切、おどる阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら、踊らにや損損エライヤツヤ〜である。連中の提灯や浴衣の柄を見てもなかなか面白い。曰くやつこ連、あかつき連、たこつぼ連、阿呆連、賢呆連、農林省の役人連中の農林連、徳島大工学工部部の徳工連、全化学部の徳化連とある。徳島専売局のバツバ連は煙草のパイプと煙の輪のつなぎ模様染め抜いて居た。阿波銀行が来る、四国銀行が来る。此の連中の浴衣は算盤珠のくずし染めナシヨナル電機型の肩から斜への派手好み、漁業組合連は漁網に波の乱れ染め、浴衣の柄もなかなか多種多様い、参考になる。職業安定所の職安連、達磨を冠つただるま連、中にも驚かされたのは徳島裁判所の連中、日頃の堅苦しさを振り捨て、口髭の上へ頬冠り。手振り鮮やかに踊らにや

ソノ〜とやつて来る。大阪の検事や判事さんにも一度大衆の前でエライヤツヤエライヤツヤとやらして見たいものだろうと思つた。人の噂に話は半分のだと阿波踊りに関する限り、そのすばらしさは到底話だけでは想像は出来ない。古いが矢張り百聞一見に如かずと踊りの話だから提灯を持つて置こう。

阿波踊り見物に、さそわれたので僕も行を共にする事にした。初めて見る本場の踊りは、実に楽しいものだった。想をこらした揃いのゆかた、鳥追い姿の踊子、白足袋が跳ね、手が舞い、街中が踊つて居る感じが、さすがに〜踊らにや損ん〜と云う気がした。一行が川柳人だけに到る処、ユーモアが続出するのも面白い。中にも船中で服を替替えた路郎先生の、ゆかたに靴履きで踊見物、超然と徳島の街を散歩されるあたり、実に川柳人らしく、道行く人の不審な視線が先生の靴と顔を見くらべて居るのを見た時、僕も思わずふき出してしまった。(米田三男之介)

阿波踊り見物に、さそわれたので僕も行を共にする事にした。初めて見る本場の踊りは、実に楽しいものだった。想をこらした揃いのゆかた、鳥追い姿の踊子、白足袋が跳ね、手が舞い、街中が踊つて居る感じが、さすがに〜踊らにや損ん〜と云う気がした。一行が川柳人だけに到る処、ユーモアが続出するのも面白い。中にも船中で服を替替えた路郎先生の、ゆかたに靴履きで踊見物、超然と徳島の街を散歩されるあたり、実に川柳人らしく、道行く人の不審な視線が先生の靴と顔を見くらべて居るのを見た時、僕も思わずふき出してしまった。(米田三男之介)

さいませ(御免なしてつかはれ) あなたの姉さん(おまはんのあんねさん) 帰へつてますか(もんとるか) 久し振りに(えつとぶりに) 達者ですか(息災で) 入口(戸のぐち) まあ上つて下さい(まあおあがりなして) 甚平(でんちゆう) 苦しい(せこい) それ程に(やんだ) 冗談、無茶(ごちやあ) 藏つておく(つまえとく) 少し眠つたらどうか(いとくち寝んでかい) 丁稚(ちよきさん) 宜敷(あいじように) あげます(あんそ) おくれ(か) 構いません(かんまん) でよ) しようむない(たつすい) そうですか(ほうで) あるじやないの(あるでないで) そうだから(ほなけん) 死ぬ(ほてる) こわれる(めげる) みをこし(けんどこ) ちくわ(ちつか)

右の方言を綴つて短かい会話を作つてみた。
「御免なしてつかはれ、おまはんのあんねさんもんとるか、えつと振りに会わんが息災かいな、戸のぐちに立つてないでまあお上りなして、この暑いのにでんちゆう着てせこうないで「やんだせこうないわ」ごちやー云わんとでんちゆうつまえときな。いとくち寝んでかい、その内に、ちようきさんが、もんで来たら、あいじように云うてやるけん、かんまんでよ」
(松江梅里)

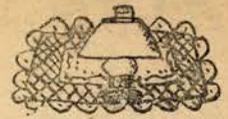
シローが好きだ。彼の女達の仕事に對する熱心が好きなのだ。しかし阿波踊の方はモット好きだ。それで皆を誘つたのだ。
仕事より遊びの方が好きだと云う意味ではない。あの踊の忘我の境に云うべからざる魅力を感じるのである。更に来年を期待しよう。
(麻生路郎)

米田三男之介
阿波へ来て観に来ただけの阿呆になり鳥追いのしなよい振りに一寸惚れ
中島生々庵
来て見れば踊らぬ阿呆が二十万
眉山の驚い、殿様を嬉しがり
銅像にされてお弓の白々し
後藤梅志
阿波踊いきな弾手に惚れて来る
三味肩にお帰りになる阿波踊
見はるかす鳴門は白い波がしら
麻生路郎
そんならと踊る阿呆になるのも居
踊らな損々わたしも入れおくれやす
商用で来たのも踊る阿波踊
阿波踊の由来
阿波踊は毎年旧盆の三日間、徳島全市をあげて踊り狂う一大イベントである。天正十三年七月十五日、徳島の城主蜂須賀家政公が、阿波十七万五千石の国主として徳島城を築き、その竣工祝に、城下の百姓町人を招いて、築城工事の労をねぎらう無礼講の宴を催した。よるこんだ城下の人々は夏の宵を月が傾くまで、踊り狂つた。これが殿様の御意にかなない毎年の踊ることを許されたのが阿波踊の縁起である。(S)

阿波踊見物に、さそわれたので僕も行を共にする事にした。初めて見る本場の踊りは、実に楽しいものだった。想をこらした揃いのゆかた、鳥追い姿の踊子、白足袋が跳ね、手が舞い、街中が踊つて居る感じが、さすがに〜踊らにや損ん〜と云う気がした。一行が川柳人だけに到る処、ユーモアが続出するのも面白い。中にも船中で服を替替えた路郎先生の、ゆかたに靴履きで踊見物、超然と徳島の街を散歩されるあたり、実に川柳人らしく、道行く人の不審な視線が先生の靴と顔を見くらべて居るのを見た時、僕も思わずふき出してしまった。(米田三男之介)



「アサヒビールはあなたのビールです」
ある。(S)



独立体川柳点

について

阿達義雄

大衆的前句附ともいふべき『川柳評万句合』の附句が如何なる過程を辿つて独立体の川柳点、所謂川柳(又は狂句)となつたかといふことは宝暦七年より寛政元年に互つて刊行された『川柳評万句合』の前句(題)を検討することによつて略々知られるのではな

いかと思ふ。川柳評の万句合の前句は、題句ともいふべきもので、之は寧ろ前句題と言つた方が分り易いと思ふ。此の前句題は『川柳評万句合』に於ては、其の当初から「祝ひ社すれ〜」「美しい事〜」等の専ら疊語的なものであつた。万句合と言つても、之は、前句附であるから宝暦頃の附句は其の前句に良く附くことが考えられていたのであつたが、明和二年、吳陵軒可有が『川柳評万句合』の中から、附句だけで意味の分る句を抜

いて『柳多留』初篇を出してからは、附句だけで独立して意味をなす句が重んぜられる様になつて来た。安永年間に入ると、今迄毎年毎年同じ様な前句題を提出して来た爲に今度は類似的前句題ではなく、「同じ前句題」が屢々提出される様になり、前句題を軽視する風が生じていたのに加えて、天明元年刊の『柳多留』十六篇の巻頭に次の様なことを柄井川柳が発表している。

「前句にかゝはらず古事時代事趣向よろしければ高番の手柄あり、すべて恋句世話事ばいしよく下女舞の句にあたらしき趣向むすべし手柄多し、年々の勝句を味ひて考ふべし。」

要するに前句に拘泥せず、一句の趣向を重んぜよとに、一句の趣向を重んぜよと柳の言葉は、天明元年以前に述べたことを、吳陵軒が之を

天明元年に発表したのかとも考えられないこともない。この声明が前句題軽視の傾向に拍車をかけ、天明朝に入ると、前句題は蛇足的のものになつて了つた。前句題を厄介視している情勢は、安永から天明にかけての『川柳評万句合』の刷物によつても知られる。

先ず、安永五年鶴印(十一月廿五日)の万句合の刷物から勝句の句頭にあつた○▲×などの符号がなくなつた。この符号がなくなれば、この時の前句題に、

美しひ事〜
○本望な事〜
▲あつまりにけり〜
×かたひ事かな〜

という風に符号があつても、それ等の勝句がどの前句題に對しての附句か分らなくなつたのである。取り残された前句題の頭の○▲×の符号も何等の意味もないものとなるのである。更に、安永六年松印(九月廿五日)の万句合の刷物からは、前句題の句頭の符号も削られて了つた。

前句題が万句合の刷物になくとも、予め、一年分の前句題が発表されていたこともあ

るが、兎に角、之によつて前句題が軽視されて来たことが分るし、少くとも安永五年以降は、鑑賞者は、附句としてではなく、単独の句——川柳点の句として味う他はなかつたのである。

次に、天明六年九月廿五日、十一月十五日、十一月廿五日の川柳評万句合の刷物には、前句題も冠句もなくなり、更に、これが天明七年十月十五日以降の刷物になると、前句題、冠句共に全く記されない様になつて了つた。

天明朝には一般鑑賞者は、前句題を殆ど問題にしなかつたと思われるし、又、符号を削られてからは、前句題と照合したくとも出来なかつたのである。

以上は、八月から十一月又は十二月にかけて催された定例の川柳評万句合について言つたのである。今迄、この宝暦七年から寛政元年に互る定例の万句合ばかり注意されて、それ以外のものが等閑に附されて来たが、明和六年から、右の定例の川柳評万句合の催されてなかつた期間、即ち一月から七月に互つて、特設の万句合が催されているのである。

この特設の万句合の大部分は花角力万句合又は花角力力會などと称せられていた。この特設万句合こそは、独立体の川柳点の発生を考える上から見通すことの出来ないものであらう。第一に、花角力力會に於ては、いずれの刷物を見ても、前句題は存在しない。

それよりも、花角力力會の刷物を見ると、その大部分のものに、「右御句柳樽何篇へ相記し近日より賣出し申し候云々」という文字があり、其処に掲載されてある勝句が悉く『柳多留』に収載されていることが注目される。

花角力力會は安永六年から



熱眠てきますか?
不眠症・神経性不眠症・神経衰弱・ヒステリーの方に

カルモチン錠

30錠(80円)・100錠(200円)

武田薬品



近作
柳樽

麻生路郎選
北川春巢選

せわしないお経に佛さんあきれ 兵庫縣 酒井ひか平
 抜け目ない僧侶作柄はめて去に
 ようもまあ西瓜に押し太鼓判
 婦人会の講習今日は盆踊
 もつと叱られると思うて 山口県
 弱い子がきちんと寝てるのも淋し
 ちんぎトす去年と同じ日から鳴き
 片ちびの下駄でひつこう逢 大阪府 石川ひさみ
 小料理屋ソーラン節が流れて来
 女にはデフレと言わすくめんする
 薄化粧逢いに来もせぬ顔へぬり
 南瓜をかかえのんきに紙芝居
 お見舞は逢いに行かれぬ女文字
 昇給へ中元の砂糖効いたら 兵庫縣 吉原 紅月
 ヒロポンとやらを都会でおぼ 兵庫縣
 中元にもろたビールで気前よし
 台風のニュースへローソク買 兵庫縣
 憎しみも怒りも恋の化身にて
 草刈に来たとは知らぬキリギリス

稲刈りのパーマがゆれる穂がゆ 兵庫縣 出口白猫兒
 新妻は何も言わぬに酒を出し
 タバコ臭い手で散髪屋鼻つまみ
 草むらの薄荷へ鎌の手をやすめ
 干し物を入れて夕立待つており
 ヘリコプター音に宣傳効果あり
 流行へ明治生れが腹を立て 今治市 長野 文庫
 停年も恩給もなく小あきんど
 表彰をうけて世間がせまくなり
 借金のかたになつて君も僕も
 故郷なまり心の窓を開け放ち
 心頭を滅却すればねむくなり 大阪府 清水 望峰
 泣かなんだ事で駄賃をまたとられ
 素直さがよけいに痢の虫にふれ
 バットの標かくして火をかりる
 バックミラーグサツと 山口県 暗い道
 来て見れば海水浴も暑いとこ 兵庫県 芝原 洋史
 精霊を流すに川のきたなすぎ
 えとこを彼女に見せておぼれ
 まだ踊りたらぬか妻へ踊つて見
 やつとスト解決したら社が倒れ
 守銭奴と云われる程に持つて見 滋賀縣 土守ト坊
 お寺から貰つたお菓子虫が居り
 習うより慣れバリカシが甘くなり
 岩どんで過した主家へモーニング
 金魚もう一つになつて秋となり
 ざるそばの海苔をとばした扇風機 大阪府 安井 久子

催され、天明朝には十五回、寛政元年にも屢々催されてい
 る。
 この事實は何を語るかとい
 うに、当時にあつては、独立
 体の句でなければ、柄井川柳
 が之を勝句として採らなかつ
 たことではないか。之は前述
 の天明元年の柄井川柳の声明
 (選句方針)と照らし合わせて
 含味すべきことと思われるの
 である。
 尙、明和六年の一月から七
 月にかけて、毎月五日・十五
 日・廿五日に特設興行された
 万句合の勝句百二十二句の全
 部が「明六・五五会」とい
 う川柳評万句合の刷物に収めら
 れているが、之等の万句合に
 於ては、毎回、同じ前句題
 「いさみ社すれ」「けつ
 こうな事」「かくべつな
 こと」「よいきげんなり
 を繰り返したと見えて、之等
 以外の前句題は示されてはい
 ない。又、之には前句題に
 も、勝句にも、○△×等の符
 号が全然ないのである。
 此の明六・五五会の勝句百
 二十二句の中から「柳多留」
 六篇へ四七句、九篇へは一三
 句抜萃されているが、之は少
 くともこの会で詠まれた句の



婦唱夫隨風もおこらず波たたす 岡山市

恥らいもなし行水を子沢山 新得郡

株二百持つて経済紙に変える 新得郡

物真似は総理の声で鐘になり 和歌山縣

好き嫌い言わぬ胃となる失業者 和歌山縣

大掃除今日の新聞敷かれかけ 米子市

灯を消して祭囃子を聞く孤独 米子市

指定席若やぐ妻とガムを噛み 赤穂市

紙芝居子の臍くりで喰つて行き 赤穂市

此の母にしてよく喋る子に育ち 愛知縣

履歴書に旧帝大と括弧つけ 愛知縣

熱帯魚観るにビールを奢らされ 大阪府

絵封筒が来て母親がすかして見 大阪府

商用の時は半タク待つてのり 食散市

ヒロポンを打たねばなほ娘で帰り 食散市

父に似て居るとも云えぬ通信簿 岐阜縣

ホームラン／＼ストライク／＼よく眠り 岐阜縣

どの窓も病氣忘れている花火 出雲市

高原の散歩聖と云う委 出雲市

幸福はわくもの雲を見ていたり 山口縣

黄麥米みづほの国の事でした 山口縣

失恋もやせる薬にならんのだ 和歌山縣

幸福な家庭に育ち苦勞性 和歌山縣

子から来た見舞画も書き歌も書き 岐阜縣

お稽古になるとこわいお師匠はん 岐阜縣

無駄使いするなどパチンコへ出 愛媛縣

佐々部 廣佐志

高野 不二

岸本 木魚

須藤 鉄平

川西 去水

飯田 柳庵

西出 洋一

長尾 越鳥

石神 古木

森山 莊

同 安平次弘道

同 田中無津美

同 高山 武士

同 鳥井 川鳥

チツブ無用と大書して値で取られ 和歌山縣

共稼ぎ愚妻の靴も光らせる 和歌山縣

手紙だけ出して帰省をしない夏 下関市

妾宅に猛犬注意の男文字 下関市

風鈴が鳴らすじまいのむし暑さ 堺市

鹹きらる資料と知らず作つてる 堺市

齒磨も懸賞付の方を買い 岡山縣

弱い子は枕はずさず朝になり 岡山縣

保育園こゝから寄附がつきまとい 石川縣

遺家族の慰問夫人のあて姿 石川縣

もう隅におけぬレターがやってくる 天理市

日記帳空白にして失恋中 天理市

一と世帯持つてチョンガー退院し 岡山縣

ヂヤズを聞く群衆の中にて孤独 岡山縣

近頃はだめだごピース喫うて居る 山口縣

食通の鼻で産地をかぎ当てる 山口縣

盆踊母には母の連れがあり 和歌山縣

娘もう他人のような故郷便り 和歌山縣

人の飯骨のありそな手紙来る 大阪府

人形を背負う頃には次が出来 大阪府

蚊帳を吊るあいだも待たず酔 松江府

サジズムが満腹しとるボクシング 松江府

西部劇四十男が飽きもせず 大阪府

約手で倒し約手で倒される 大阪府

下手な三味音痴の唄に助けられ 大阪府

同僚が嫂となり波靜か 大阪府

同 久保田青竹

同 中村九呂平

同 辻 圭水

同 大町 別城

同 石川素百々

同 菱田 満秋

同 小野花園子

同 岡本 鳥石

同 木下 義廣

同 吉岡 草白

同 西尾 鈍白

同 不二田三夫

同 中林 進歩

同 洗濯機買つて女房は若返り

が、とりわけ我々柳人としては、氏が川柳に親しみを持たれて居た事で一層追憶を深くするものである。中でも武玉川に心を惹かれたように川柳は武玉川によつて初めてその真骨頂を發揮するものであると絶賛された。

かつての川雜句会終了後折よく来会された氏を囲んで一席有志で淺酌を共にした事も思い出の一つである。その時にも二、三武玉川の句を引いて一流の解釈を加えられた内で

肩にかけると生きる手拭

などは最も氏の愛誦吟だつたらしく何度も繰り返された。川雜へも數多く寄稿されて居るが別稿のものも最後となつた今茲に掲げて氏の御冥福を祈る次第である。

川柳語

川柳作句上別に川柳語と言うもののある訳ではないが、川柳らしい川柳と言へるものはたしかにある。古句にはやゝそれらしい極手があるように思えるが、そんなものにこだわると鼻もちならぬものとなつてしまふ事請合である。本誌新春号で川村花菱氏が「言葉のさわり」と言う事を申されたがさすが文学者だけあつてうまい事を言われたものだ。昨今の作品は説明的な句が多いようだが説明は散

合筆



居眠りの小鼻が憎い終電車 西宮市 東浜 成詩
 見舞客世間の裏は云わず去に 同
 病中の閑がクイズへ精を出し 大阪市 半田 夏生
 病院へ二号を連れて見舞いに来 同
 改札口切花の香が狭く抜け 下關市 岡 藤四郎
 二の腕へ豊かな髪が梳きこぼれ 同
 酔漢をいなす手綱のあるマダム 大牟田市 吉村奈良夫
 人情の温きに触れた三十路過ぎ 同
 嫉妬人になつて見たいと言つて 大阪市 井上 鴨水
 吊皮に種痘の痕の腕が伸び 同
 白浜で値切る役をば言いつかり 大阪府 深見 雅堂
 お世辞にも娘と見られ妻あわて 同
 ナースウインク婦長来るか 岡山県 藤原 民徳
 来て泣いて別れに泣いて面会日 同
 アベックで別な気持で来た浜辺 下關市 加藤 司楼
 肩書の多い名刺でよくしやべり 同
 冷房が完備していて風邪を引き 大阪市 竹内花代子
 証券もストをやりやはる世とは 同
 何んにも云はず 下關市 藤田 蘇人
 レクレ 同
 面会は謝絶の部屋に高笑い 尾崎市 林 澄子
 都会では隣へ行くに鍵を掛け 同
 愛情が片寄つた子に家出され 大阪市 谷 一平
 行列ものどかさうなり大劇前 同
 正札の付いた帽子で兒ははしやぎ 岡山縣 浜口志賀夫
 テレビジョン島の浴衣もみんな寄せ 同
 洗濯機持ち鋸借る二号さん 下關市 松本十字星

二死満塁放送半ばで薬の名 同
 青空の女も家に子が二人 大阪市 坂田 眞一
 葦叢に待つたなしやと念を押し 同
 老鶯の声も涼しい阿蘇の谷 下關市 重永成理智
 ダイヤルをやたら廻して落付かず 同
 雑沓で一円拾うも年のせい 大阪市 池戸 桃村
 趣味までも上司に合わす課長連 大阪市 榊本みのる
 地下足袋を綺麗に洗う日曜日 倉敷市 佐藤千代春
 女子大出今更恋はあほらしく 出雲市 美好 雪生
 既成品ですなど質屋にいじくられ 倉敷市 山本 春也
 嫁く事もほのかに匂わせ手紙来る 同 深田やよい
 女まだ疑つていいる 特 價 品 大阪市 丹波 太路
 妊婦は祈る玉子に目鼻といかず 大阪市 西出 一栄
 冷蔵庫買ったが祭用となり 和歌山縣 植田てる子
 方言に慣れて療養板に付き 和歌山縣 松本 梅里
 廻礼の名刺主人が来たのかな 大阪市 西出 甚也
 正客は反身の胸にバラの花 大阪市 酒田 透水
 夕涼み匂いはみんな美人なり 京都府 柿本 古竹
 掃き出されるような日曜の駅 鳥取市 岩田天保鏡
 葉巻ブカ 和歌山縣 北平よし子
 スト騒ぎまだ折合わぬ徹夜の灯 岡山縣 久安 自樂
 水都祭ゴモクの様な人に酔い 大阪府 国島 孤舟
 冷えているビールへ下痢をか 大阪市 清水 和夫
 扇風機かけて晝寝の二号邸 大阪市 橋本みどり
 父ちゃんの下痢派手な音を出し 倉敷市 石本 一子
 海へまで来て日焼をばおそれどり 大阪市 藤井 五茶
 花束に埋もれ帰朝の第一声 大阪市 川口 秋香

文であつて詩ではない。文芸は文字によつて表現するより仕方がないから文字即言葉に注意が肝要であるときれて居る。そして川柳には川柳らしい言葉がある筈だし又その適切な言葉の発見創造に努力せねばならぬと断じられ、それが言葉のさわりであるとも言われて居る。

路郎先生も常々説明の句はあ、さよかと言う迄でいゆるさよか川柳、報告川柳でしかないと言つて居る。川柳らしい川柳と川柳のための川柳とは違ふ。何とかして作らうとする態度は一応その主語は光つていてもあとがだれてしまつて全くつけたりに終る。私自身の句をふりかえるとどれもこれも冗漫な句で隅々まで行き届いた句と言うものは見当らない。言わば空気の足らぬ風船のようなもので、やゝ風船の体になつて居ると言える迄である。

先生のお作を評するのは誠に恐縮であるがそのどれもが一字一語ゆるがせになつたものはない。眺めば読むほど意味の溢れるものである。お論勿作態度もその推敲には真に鑢骨のおもいをなされていると拝察する。句作上推敲と言うことは同時に言葉の発見となり無駄のない句ともなる。要するに推敲が第一と今更ながら私自身への言葉として感銘すべきであるとおもふ。



秘訣など考えんので長生し 石川縣
 事情きく民生委員は眼をつむり 大阪府
 誘蛾燈の様にネオンが恋しくて 山口縣
 我が足の裏を見なおす青疊 御坊市
 これより三役でラヂオ大きくし 天理市
 風鈴の音もヒステリーの気にさざり 天理市
 女先生三つの唄に出てやはる 熊木縣
 啖壺を抱えてまでも座り込み 倉敷市
 病の身今年は山も話だけ 倉敷市
 イヤリング伊勢の土産の貝細工 奈良縣
 盆踊見ていただけで疲れて来 岡山縣
 外遊の予定どう〜予定だけ 群馬縣
 六疊の間を陣取つているおもも箱 長野市
 トンネルを出れば空気の味を知り 大阪府
 気前よく富山の薬割引し 倉敷市
 灰皿の吸がらほぐす退屈さ 大阪府
 裏口の方へ彼氏を待たしどき 岡山縣
 洗濯器廻して置いてようしやべり 岡山縣
 一寸持ち一寸忘れるハンドバック 大阪府
 ポン中の弟が居て嫁が来ず 具塚市
 ふるさとのたよ今日花を活性 大阪府
 子が一人出来てビールもたしな 貝塚市
 キャンデーが親子へ溶ける夏の月 出雲市
 病床に夫の炊事の音きこえ 尾崎市
 都心からデフレの皺がよせて行き 尾崎市
 洗濯器テレビ・ミキサー当てる 滋賀縣
 嫂もこの頃負けておらぬなり 兵庫縣

中松 一恒
 杉森眞沙魚
 加川 成人
 岡崎 泰三
 山崎 美奈
 藤井 千年
 淵川 秀敏
 小野 廣志
 横山 宣昭
 鍛永 晶平
 坂手 有子
 萩原 竹郎
 森本黒天子
 酒田 清子
 野田 一念
 酒田 童子
 西山 晴々
 山本 光男
 坂倉 一正
 中辻 芳男
 大塚 操
 護川 梢月
 坂本竹ん馬
 針重 白雨
 岸本 丹馬
 入江 示羊
 前川左文字

夕涼み流れる星へふと案じ 大阪府
 慾だけで出来ぬと故人見直され 岡山縣
 捨て切れぬ虚栄は間借を秘して居り 石川縣
 猫いらす仇背廣を囓られる 下關市
 後添を迎えてからの流行歌 岡山縣
 二百ミリまた何億か押し流し 下關市
 八等身男は別にさわがれず 岡山縣
 好きなもの喰えとは医者の情け 下關市
 叩く手を西瓜はぼんと跳返し 岡山縣
 間借など忘れて泳ぐ海廣し 出雲市
 洗濯機夫は使用法言うただけ 岡山縣
 慰めに来て貰い泣きして帰る 下關市
 松原の読書が治す子のあせも 岡山縣
 内職で着て扶助料で樂に喰い 下關市
 晝寝する間もキリギリス鳴きつゝ 岡山縣
 面会の子が見せに来た三輪車 岡山縣

伊藤 光二
 黒住 一路
 桑山 とよ
 宗貞 白馬
 岡 一門
 山田伊三男
 松島 不在
 多田ほなみ
 藤原 美雪
 佐藤 泰之
 富池 茂人
 中村九呂平
 大石 久
 中土居 圭華
 泉 木太八
 東 静人

BK 放送川柳

課題「ネオン」

清水白柳子選

(入賞第一席)ネオンまだ險に残る宿に寝る 京都府 佐々木
 弘(入賞第二席)保護されて急にネオンが怖くなり 群馬市 福
 智 一夫(入賞第三席)アベックとネオンを生徒見てかえり
 群馬市 小林しげる(佳作十五名)堺市 石橋松雄・広島市
 島 草二・西宮市 福島郁三・大阪府 木口賀峯・洲本市
 中野一夫・大阪市 西出一栄・兵庫県 田原藤太・神戸市
 大十九一・京都市 鈴木志郎・神戸市 瀬見初之助・大阪府
 木村水堂・京都市 木下信夫・松阪市 万濃 修・大和高田
 市 戸田悦子・大阪府 武部香林 尚誌面の都合上佳作の
 入選句発表は割愛させて頂きます。

大阪市民文化祭 大阪市民川柳大会

日時 十月三十一日(日) 十時開場
 会場 毎日新聞社講堂

司会者 古下俊作

開会の辞 深野晋水

挨拶 市川柳 側

講演 「風にそよぐ川柳」 近江砂人

「道遙かなり」 中岡三吉

「窓を開いて」 堀口塊人

「ロシユフォオの箴言を 通して」 麻生路郎

応募作品発表

席題 四題(別紙)当日発表

兼題 締切 十二時卅分

「新劇」磯野いさむ選

「社用」水谷鮎美選

「都会」本田溪花坊選

「故郷」岡橋宣介選

「弱虫」清水白柳子選

「健康」岸本水府選

閉会の辞 松江梅里

投句先 用紙官製はがき一枚に

投句先 締切十月二十日着限り

大阪府北区内中之島市

役所内教育委員会

社会教育課内

市民川柳大会係宛

大阪府教育委員会

大阪川柳連盟

後援 毎日新聞社



川柳第二教室

戸田古方

七、雨の句から

集つた一二〇句のうちの一割余一六句が放射能と雨とむすびつけたものであります。こうした時事吟はなかくむつかしい、したがって佳句も少ないようです。

日米の親善を裂く雨が降り・この雨へ傘のかわりに計数器・この雨もまたネタにする反米家・近頃の雨よりもカウントで・レイノコト防弾チョッキのように着る・放射能雨の風趣も破壊して・頭髮の抜けてみよとて雨を往く・雨の降るたびに思は放射能・マダロ食い雨に打たれて死んだらか・春雨じやと云うておれない今日の雨・水爆の雨に戦く八千万

水爆実験

放射能雨で表へ出るのが恐くない

誰でもねらうところは一つと見えて、似たりよつたり、日米関係の句があるかと思ふと髪の毛が抜けるとかマダロとか。レイノコトを防弾チョッキに見るなどは思ひ切つた面白い見方です。民族の

怒りはどの句からも感ぜられませんが。

B 春雨にぬれても行けぬ放射能 (雄声) B 放射能一そう暗い梅雨にする (雲平) B 放射能こんな田舎へまでしよう (碩水)

この三句は幾分情緒と主観で穿ちを包んでいます。

A おい燕放射能ある雨が降る

雲平

この句は六月号の路郎先生のこの雨に帰らしやんすか放射能の影響をうけているのでしよう。

先生のピントが人間世界に向いているのを句主雲平氏は動物愛、自然愛に拵けているといえます。素朴な親しめる句です。

一般の作句。今月はH級に主眼をおいて見ましよう。

H 雨上り又鯉料理食えるらし

川柳は大衆の文芸であり、その題材も生活に結びついているのですが、食慾に関する佳句は少ないようです。この句も下五の「食えるらし」はどうにかならぬものでしようか。

H 立話雨ではじめて雨で済み・H 雨上降れ雨上降るなと田植時・H 出迎えの雨具が重い雨がやみ
どの句にも雨が二度ずつ出ています。雨から雨までの時間の経過、降れよ、降るの矛盾(へのんではしやめてほしい酒をつぎ(霞乃先生)の句を思い出して下さい)それから雨具と雨が止みのオーバーラップ。技巧として研究すべきものがあるにはありますが、技巧は表面的で、もひとつ必然性が無いとして句として喰ひたりません。

H 退社時予報にさからう俄雨
H 雨降りを面会に来る妻の愛・H お隣へ留守をたのんで行くコイ

名詞の扱い方もむつかしいもの一つです。十七音という短い型におさめこもうとして新語や新しい圧縮語が出来たりしますが、耳にすらりとひびいてはきません。なるべく普通の言葉を無理しないで使う方がよろしい。退社時は目でみればわかりますが、耳だけでできるとすれば「タイシヤドキ」も「ヒケドキ」もおかしくつづきがわるく「タイシヤジ」ではどつかのお寺とまちがいそうです。妻の愛はずばりすぎて余韻も何もありません。コイモリもコイモリをもつて迎えに行くのかコイモリをもつてコイモリをさして行くのかどちらかでしょうが省略がすぎにきらいがあります。

H 晴耕雨読我れ雨を愛す・H 北の風晴れのち雨にふりもせず・H ほどほどの雨も喜憂の浮世かな
この三句は引用の句です。「晴耕雨読」という熟語。「我れ雨を愛す」もどつかできいたようなことばズバリズバリと行きすぎて息のぬき場がありません。「北の風晴のち雨」は測候所の発表の文句そのまま、天気予報への皮肉の句としては上の部でしょう。第三句の「喜憂の浮世」というのも常套語です。こうした常套語自身がある枠を作つてしまひますので余程うまい穿ちでもないかぎり句を殺してしまふ心配があります。

H せつしような雨具をもつて出て来たに・H 天気待ち照る照る坊主雨にぬれ
テーマも表現ももう一つピンときません。前の句は「流会」という前書があつてやつと意味がわかる程度、しかも流会とは雨で会が流れるのをさすかの様な錯覚をあたえそうです。後の句は「天気待ち」と「雨にぬれ」と全く無意味な重複です。

H にわか雨皆かけ足でかけ足で
H 俄雨隣も縁をばた／＼と・H どの句も動いている状態をあらわしていることはいりますが「かけ足」とか「ばた／＼」とかは露骨にすぎます。句の体という点からは第三句がやゝとものつているよ

うですが「家中を鳴動」はむりに笑わせようとしています。誇張がすぎるように思ひます。
H ばあちゃん自慢は天気予報だけ
あまり組合せが特殊すぎてすらすらと受取りにくいようです。
H 雨降りて地固つた大喧嘩
「雨降りて地固る」という引用ですが「雨降りて」とわざ／＼文語を用いる必要はなさそうです。下五の大喧嘩も何とかならぬですかなあ。
H 雨が止み急に店先空いて来
「空いて来」がコツンとつかえて来ます。「空いて来た」とでもすればすらすらとしますが
H 雨待つて植える早苗も赤だす

赤だすきと早苗と何か特別の関係があるのですか、田植の赤だすきかもしれませんがそれならまるでキマリ文句すぎます。早苗の「も」がいつそう大そうな感じをあたえるのでしよう。
H 天気予報こんな管でない雨に
「こんな管でない」とわざ／＼調子を破るにあたりないでしよう。これを破調したことが句主のとまどいをもつと面白く表現出来るとしたら又話は別になります。H 雨上り雨具がぬげと汗をかき
「雨具がぬげと汗をかき」は省略がひどすぎます。
(先年刊行は前巻)



川柳家に「赤」は

いないか

品川陣居

☆ ひとつの疑問
 ぼくはフトこんなことを考えたのだが——川柳作家のうちに「赤」——純粋な共産党員でなくとも、いわゆるシンパとか同調者とかいわれるほどのひとはなからうか——ということである。

敗戦後、勤労者という名のわれわれは、その職場で「組合員」たることを必然づけられたり、近い日の前に組合員であつたという、いわゆる「組織」の中に入り、いた者が多いのであるが、そういう中に川柳家も在るが、その中の匂いはいでいるはずである。ということは、いまの組合組織の背後には「党」——共産党があるからである。あえて全部が党員とはいわれないが、党のスローガンによつて組合が運営されていることは事実である。そして、そのこと自体ぼくは「わるい」ことだとはおもわれない。組合の成立している会社では労規法によつて、ムヤミ

にクビにすることが出来ないし、われわれ勤労者の側からすれば、賃上げその他を要求するときに、便利——というより大きな力を与えてくれるものだから、「組織をもつ」ということは大へんけつこうなことだと考えている。

☆ 勤労川柳人

これは戦前のことだが、俳壇には「俳壇事件」というのが起きて、当時日本放送協会文芸課長であつた小野蕪子（賢一郎）が、富安風生（現ホトトギス派元老）その他と結んで策謀し、いわゆる無季俳句の連中を、ことごとく官憲に渡してしまつたのである。

ぼくは戦時中は朝鮮京城や北支北京にいたので風聞しか知らなかつたが、ここに京都では、とてもヒドかつたときいている。

いまになつて考えてみると、表面は、「無季」は天皇制の否定を意味する、すなわち無政府主義で

あるという、もつともらしい理由がつけられたのであるが、当時改造社から出ていた「俳句研究」の編集者だつた山本健吉氏の楽屋囁きだと、実は新興の勢いすさまじかつた無季俳句の作者にたいする嫉妬反感が、その主な原因だつたというのだ。かのごくにぶち込まれた無季作者はいい面の皮であるが、今日でも「オレは共産党だ」と大つばらに口のきけるのは日共の連中くらいのもので、あまり大つばらには名のりをあげてはいないのだから、川柳家の中に黨員ないし同調者があつては、表向きにはあまり知れまいとおもう。

社長さんや重役さんの多い「川柳雑誌」の投句者には勤労階級の人たちが多数含まれているだろうから、職場では「尖鋭なる斗士」である人もあろうというものである。

すると、その作品行動にもイデオロギイを生かして、党のスロー

ガンを盛り込んだものがあつていいわけである。

九月号の「川柳塔」に、それらしいものがあるか、どうかと、いまひろつてみると、デモ隊よまたに失業おもえかし という布施市の吉田水車さんのが目についた。

この句はなかなか、あなどりがたい「批判」を含んでいるとおもう。だが組合員としての立場から詠まれたものではないようだ。デモ隊の「空ツ騒ぎ」をべつ見した作者が、——お前たちは、いゝ気になつて赤旗を振つているが、巷（ちまた）には失業者があふれているじやないか、そのことをちつとは考えてみてくれ、というのであつて、作句の立場はそうであるが、労働運動全般にたいする日頃のものたりなさを打ち出したものとして、ぼくはこの一句を高く買うものだが、ぼくは水車さんが重役であるか勤労者であるか個人的なことは何も知らないけれど、大きく労働運動を批判しているところに敬意を表するものだ。

長椅子へ暇あり過ぎる身
 まあずけ
 これは池田市の黒川紫香さんのである。どうもこれは勤労者側に立つての作句らしい。おなじ紫香氏のもので

美しさをうたつたものだ。
 争議団二号の家もとりかこみ
 大阪市 武部 香林
 大臣はいゝな取り得掴み得
 八代市 佐野 卜占
 クビキリへ私情の涙限りなく
 奈良県 西辻 竹青
 大阪の廣さ失業してわかり
 大阪市 西森 花村
 失業の立場労働が憎うなり
 岡山県 大森嶺句楽
 憂ることも仕事となつたストラ
 イキ 堺市 高崎 雄声
 どうやらこれらの句は勤労者の作品らしいが、あえてプロレタリア・イデオロギイを強く打ち出しているとおもえない。
 ぼくが考えてみるのに、よしや党や組合に所属していても、「川柳する」となると、するりと気軽に一句にまどめてしまつたのが川柳に一句にまどめてしまつたのが川柳する者の在り方だとおもひ込んでゐるのではあるまいか、野暮なギスギスしたことは川柳にならないというのではあるまいか。ぼくはその点が、どうもあきたりないものである。

☆ 天皇制と川柳

そこへゆくと路郎先生の、今月の不朽洞句帖の

天皇北海道へ二句
 北の旅風の強さも身にしみん
 あゝそう あゝそうと繰返す
 旅の空

の如きは、戦前なら大したことになつたらう。天皇制を否定する百方言より、この二句の強さはどうだらう。あえて否定するなどという生ぬるいものではなくて、天皇制など無視して、虚心坦懐であられるところ、まことに——お土沙じやなく頭領の貫職である。

秋風は御衣よしの装もすそに忍び寄らん

と、天皇制コチコチの従兄に出して大いに叱られたことがある。それもその管で、かれは幸徳を縛つた検事をやつたことがあつたからだ。ほくは正月、その従兄の家で御下賜の金盃を傾けたことがあるが、ズシリと手応えのあつたその金盃の行方を、いまふと考えている。

それはともかくとして、ほくも「内地」では、文学報国会にも入られてもらえなかつたが、朝鮮へ行つてからは朝鮮文人報国会のメンバーとなつて京城にあつた朝鮮総督府へも泥靴でズカズカ出かけたし、目抜き場の所のデパートなどに皇国宣揚句など掲げたもので大きな口はきけないが……。

☆ 川柳の土性骨

そこで本題にかえつておもうのだが、今の世の中で資本家にあらざる限り、庶民ないし勤労者とし

て、満足に生きていくという自意識をもつて居る者があるだらうか。おそらく唯の一人もないだらうとおもう。とすれば、われわれが川柳するからには、満足に生きていないのだ——という生活面のマイナスを一句に打ち出す管なのだが、とかく川柳をやるような者は、そういうことに不得手なのではないのか。そういう乏しい生活の哀歎をうたうのは、むしろ得意だが、世間に不満をぶつつけてやるうなどという「思想性」ないし「行動性」が足りないのじやないのか。

とにかく川柳の時代性というものは、その時代々々の流れが作用しているのだから、戦時中の必勝宣揚、戦後の自由主義とお題目は交つても、その流れの上を流れて行く泡沫であることにおいては甲乙がないというものだ。

好戦国民としてページの罰を受け今だにスガモ・ブリズンに、とじこめられている日本人のほか、ソ連にも中共にもまだ沢山の日本人がいるというようなこと、考えてみれば笑止なこと、もう時効にかゝつてもいゝのじやないのか。いまの自由主義にだつてもう飽きがきて「反アメリカ」思想が強くなりつゝあるじやないか。

俳句でも川柳でも「事」として詠わずに「もの」として詠えという一部のギロンがあるように、時代性にかゝるなということ

も一つの見方だが、時代の裡におぼれて詠つて居ることが、あとになって「歴史」を形ずくるといふ「科学性」も無視できないとすると、われわれは何を「思想性」といふ、何を本質として作句したらいふのか。

——だから、わかっているじやないか「人間性」だよ、というかもしれないが、それではあまりにバクゼンとしていて旧態依然たりというものだし、そこに在来われわれ川柳家の陥穽があつたのにかえりみれば、何かこゝらでひとつ、川柳の土性骨というやうなものをつまみつけ出したいものだとおもう。

最近の日共機関アカハタには「亡国二条約調印の日」(サンフランシスコで売国的調和条約と日米安全保障条約を結んだのは三年前の昭和廿六年九月八日)の特集として感想、意見、詩、短歌、俳句、川柳を募集すると広告が出て居る。だが少くとも川柳家でアカハタを読んで居る者があつて応募したとしても御座なりのものしか発表されまい。もしアカハタの編集者にアタマがあるなら、川柳家に本気に川柳を作らせるようにすることだけでも覚は拡充されるんだがな、これは冗談だが……。

☆ ひとつの提案

はじめのほくの「ひとつの疑問」にたいし本誌の愛読者は、何

と回答して下さるだらうか。——川柳家がアカなんて、とんでもない阿呆いゝナと一笑にふされるかもしれないし、——ナルホド、そういう考え方もおますやろナ、といつてくれる人もあるかもしれない。

柳界展望 (其の一)

は、ひとつ、いままでのように、家庭の、奥さんの、子供さんの、お酒の、愛犬の、愛猫の句を作ることをあと廻しにして、世の中のウラを、矛盾を、不合理を、エトセトラを句にしてみてほしいと提案してエンピツをおくことにする。(九・三)

- ▼本社十月句会は十月九日(土)午後六時から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催される。作句のシーズン多数来会されたい。▼南区医師会香林川柳九月句会は二十一日午後七時半から太希志居に於て開催。▼大阪通信病院川柳会は九月廿五日午後二時から五階講堂で開催。▼南海電鉄川柳句会は、九月二十七日午後六時から粉浜親和寮で開催。▼川維舞支部主催九月例会は、堺川柳人グループ共催で、二十九日午後六時から堺市九間町山ノ口八木摩太郎居に於て開催。以上何れも路郎主幹出席。
- ▼川維淀川支部十月句会は、十月九日午後六時から東淀川区三津屋北通四の二九武部香林居で開催兼題「コンバクト」「往復」「散髪」
- ▼川維玉造支部空堀川柳会は、八月二十二日午前八時十五分天王寺駅発大和天神社へ吟行、川柳献句をされた▼川維阿倍野支部句会は、九月十六日大阪市阿倍野区松崎町の西光寺で例会開催▼大
- 阪市交通局川柳会は九月十五日午後五時局病院五階サニールームで例会を開催された。▼川維出雲支部は、八月二十日午後六時から出雲市立図書館で例会を開催▼川維倉敷支部は九月例会を十二日午後一時から倉敷市南中学校で開催▼川維玉造支部(大阪市)九月第一句会は、四日夜大阪市宰相町清水白柳子居で開催▼川維大原支部諷柳会(岡山県)は、八月十四日夜岡山県大原町青美居に於て、例会開催され十坊氏が第一回銀カップ獲得なお九月例会は十日夜十坊居で開催された路郎賞は秋芳氏獲得▼川維備前支部は八月二十一日娛句集居で例会開催▼勝英川柳社(岡山県)は九月例会を十一日に藤波居で開催▼川維倉敷支部は、八月十五日倉敷市南中学校で千谷氏山陽新聞柳壇第一席入賞祝賀を兼ね、例会開催盛会であつた由▼岡山市内グループ八月例会は、二十三日に日赤で開催▼川維赤坂支部赤坂川柳社八月例会を大介居に開催



一の谷 (上)

— 平敦盛と熊谷直実 —

富士野鞍馬

六波羅で負けて裏目で又潰れ
(タル八三)

という狂句があるが、これは、一の谷の平家敗戦を、采の目になぞらえて詠んだので、六(六波羅)の裏目は一、(一の谷)である。また、それを逆に、

一の谷六の方からさか落し
(タル四〇)

と、一の谷の搦手、鴨越の坂落しを、一の裏目、六で詠んでいる。また、

平家にも須磨はあれども逆落し
(タル五四)

という句があり、源氏物語には、須磨の巻がある。平家物語にも須磨は書かれてあるが、「坂おとしの事」という標題になつてゐる。

木曾義仲に、都を追われた平家一統が、西国で勢を得て、水島で義仲を破り、福原

へ押寄せ、京都を奪回しようとする態勢であつた。

義仲を亡した、範頼・義経の軍は、続いて、この一の谷の平家根拠地を突いた。

この戦は、平家が、安徳帝を奉じて、三種の神器を持つていたので、これを京都へ奉還するべく、後白河法皇の院宣が出されたのであつた。京都には、後鳥羽天皇が、その前年に立てられていた。

範頼・義経は、壽永三年(一一八四)一月二十日、義仲を亡し、法皇に拜謁して、二十九日に院宣を奉じ、二月四日に京都を出たが、その日は、清盛の祥月命日に当るので、また五日は西ふさがり、六日は道虚日で、日が悪いので、二月七日卯の刻に、一の谷東西の木戸口で、源平矢合せと定めた。

大手の生田東門へは、範頼の五万騎、搦手の一の谷西門へは、義経の一万騎が当り、義経は丹波路をとり、三草山で平軍を破り、二手にわかれ、一方は土肥実平に七千騎をつけて、西木戸口に向わしめ、自分は三千騎をつれて、七日の未明、一の谷の背後、鴨越の難所を下つて、平軍の虚を突いた。続いて、西口、生田口の三方から攻めて、敗残の平軍を海へ追拂つた。これを、平家物語も盛衰記も後の浄るり等に興味深く書かれている。

平家の榮華ひよ鳥の声でさめ
(タル七九)

一の谷榮家新道からまわり
(拾 六)

源の會稽山は一の谷
(タル一〇四)

鞍馬育ちはからめても馴れ
たもの
(カ一一〇)

等の川柳がある。
熊谷直実と平敦盛
熊谷次郎直実は、武藏熊谷の住人で、石橋山頼朝旗上げの時には、敵の大庭景親に属していたが、後、頼朝に下り、義経の軍に従い、宇治川の戦を経て、この一の谷にも、土肥実平の勢について、その子小次郎直家と共に、西木戸口一番乗をやつてゐる。

アメリカは氣楽な国であります。其れは形式とか古い伝統に縛られるということがないからであります。そしてアメリカは廿代の若い青年の国であります。加うるに天然資源の無尽蔵と其れを開発して商品化する機械科学は已に原子時代に突入して居ります。斯くの如く現代アメリカの偉大性は物質と経済面でありますが精神面に於きましては建国以来日尙浅く深い思索と修養に缺けて居りますことは宜なるかなであります。

アメリカの川柳人 を語る

ハワイ 白砂旋風

世界は移民地であり従つて国際色豊かに殆んど全世界の各人種が雑居して居ります。アメリカには門閥もなければ学閥も財閥もなく才能と実力をして努力さえすれば思ふ存分働いて立身出世することが出来ます。此のような社会機構とそして其の中に住む人々の大陸的な大きい抱擁力は隣人の立身出世を嫉妬して此れを叩き潰すどころか其の反対に他人の成功を我が事のように喜んで協力と援助を惜しまぬ太つ肚をしたアメリカ人はアメリカのみから生れる世界的な傑物が数多輩出して居ります。本題の主人公たるアメリカの川柳人ウィルロジャヤースも亦其の一人であります。彼はアメリカの西部劇映画に出て来るお馴染みのカウボーイであります。彼の数奇を極めた全生涯を通じての特色は丁度日本の豊臣秀吉の生涯の如くあまりにも下積時代の永かつたかといふこと、そして彼等二人が過去に於いてあれ程永い不遇時代を経たにも拘らず少しもそのような暗い影のないことであります。それは彼等二人が同じように天才児であつたからでありましょう。天才児は先天的に自分の持つて生れた非凡なる才能を深く信じますが故に常に樂觀的であり明るくて陽氣であり、そして若々しいのであります。

秀吉の下積時代が足輕であつたようにロジャヤースは或る大きなサーカス団に入り綱一本を唯一の生活武器とするカウボーイの綱芸人として其の下積時代を過しました。彼は運命論者であり、更に人生の奇蹟を宗教家の情熱を以つて

そして、海上へ敗走する平軍を追い、逃げおくれた、平敦盛を、扇で招いて呼戻し、その首級をあげた。

（タル四一）
熊谷は扇をさして太刀を抜

（七） 五三）

敦盛はこの時十七才。熊谷の子、小次郎直家も十六才で、この朝戦傷している。それにひきくらべて、いかにもあわれに思い、助けようとしたが、あとから友軍が寄せてくるので、涙をふるつて、首をとつた。

敦盛もうたる頃は声がわり
（タル四八）

（七） 五七）

直実はいゝあきらめのへん
（七） 一八）
ちかづきになつて熊谷首をとり
（七） 一八）
熊谷はまだ実の入りぬ首をとり
（タル二・拾五）
熊谷は不承くゝのてがらなり
（タル二二）
直実は不承くゝに高名し
（拾 六）

等と、川柳も敦盛を惜んでいる。

あとで見ると、敦盛の腰に、錦の袋に入れた笛があつた。この笛は、祖父忠盛が、鳥羽の院からいだき、父経盛に傳わり、又敦盛に譲られ

た、小枝（さえた）という名笛であつた。三代とも笛の名人であつたようである。ところが、この笛の名が、「青葉」として、別に傳えられ、川柳もそれを詠んでいる。

世に青葉残して二八の花は
散り
（タル五二）
青葉に添えて実の入りぬ首
一つ
（七） 一九）
花は散り青葉は残る一の谷
（七） 一〇六・一二六）
須磨寺に二八青葉を吹き
こし
（七） 二九）

この合戦で、兄の経正、経俊も戦死し、父経盛は、残りの一門と共に、屋島へ引揚げた。

熊谷は、敦盛最後の委細を、父経盛へ通信したということである。

敦盛の碑にふつかける須磨の波
（タル一四〇）
（五〇）

その後、一の谷の西方の山際に、敦盛の碑が建てられ、今に残っている。また、須磨寺には、敦盛首洗池というのもある。

敦盛を討つた直実は、それが動機となり、無常を悟り、京都黒谷の法然上人の下で、剃髪出家して、蓮生坊となつた。

後ろからまねいた兩毛受也
（タル四一）

熊谷は勝つてかぶとの紐を解き
（七） 六一）
黒谷へ武をすて鏖戦へ恋をすて
（七） 一八）
黒谷に坂東声の僧一人
（七） 一五）

その後は衣で通る一の谷
（七） 三六・一二）

等と、それを詠んでいるが、「吾妻鑑」によると、直実の出家は、熊谷へ帰つてから、建久三年（一一九二）頼朝が幕府を創立した年の十一月ということになつてゐるから、一の谷の戦から八年後になる。しかし、黒谷には熊谷鑑掛の松というのがありはある。

熊谷は、熊谷（埼玉縣）へ帰つて、蓮生院を創興し、その辺は、絹の産地であつたから、蓮生になり絹売の回向する
（タル十五）

と詠まれている。また、西方浄土を拜む意味で、乗馬で東行する時も、西向に逆に乗つてあるいたといわれているので、

蓮上が馬上朝日が背へ当り
（タル八三）

蓮生の馬士尻へ来て吸付る
（七） 一五三）

という句もある。そして、承元二年（一一〇八）六十八才で入寂したのであるから、一の谷の戦の時は、四十四才ということになる。

確く信じました。そして此の信念の正しかつた事を実証する時が愈々到来しました。

彼の単調な綱芸が新奇と奇抜を好み変化と移り気の非常に多いアメリカ人にスツカリ飽かれて日一日と次第に彼の舞台が淋れて来ますと彼と座長の間の折合いも一層悪くなり流石楽家の彼も全く腐つて仕舞いでしたが運命論者の彼は最早時代の變遷に抗し難きを知り大悟諦観總てをなげうつて懐しの故郷に帰り再び百姓を始めるとに重大決心がつかますと身も心も軽々と澄んだ心境になつて彼の最後を飾るお名残り興行の舞台に立ちました。彼は人好きのするニコ／＼顔に例の如く得意の綱芸を演じながら有名な彼独特のユーモアと諷刺を以つて社会短評を始めました。彼の話が進むにつれ熱狂した全観客の破れるような拍手喝采と嵐のような声援と爆笑の渦の中で彼はしばらく立往生するという大ホムランヒットを放ちました。それは人間一生の運命を決する人生の一大奇蹟でありました。

彼が舞台を終えて楽屋に帰つて来ますと興奮した座長が真先に彼に握手を求め此の大成功を共に祝福しました。そして請われるままに再契約書に署名したことは勿論

であります。其の後の彼は話を主とし綱芸を従としましたが彼の存在と名声は全米的に其の波紋を拡げて行きました。すると機をみるに敏なる世界有数の或る大新聞社が辞を低うして交渉し彼と新契約を結びました。ロジャーズ短評欄はアメリカ大衆の身論として一度紙上に発表されますや轟々たる大反響の波に乗つて新聞紙は飛ぶように売れて行きました。それから彼の彼は経済的にも莫大なる収入に恵まれて永年の貧乏生活が初めて解放されてホクタクブとか研究会等から講演の依頼状が殺到し日夜席の温まる暇もない忙がしい生活が始まりました。

彼が毎日執筆します短評欄の特徴は彼が如何に卓越した民主政治家としての指導力を持つて居たかということ、又彼が十七文字にも足らぬような諷刺川柳を良く駆使して大胆にアメリカ大衆の胸に一分も其の急所をあやまらずにズバリ／＼と突き刺して行きますのに常に下腹の皮の痛くなるようなユーモアを以つてしたために彼は何人からも深く愛されたというのであります。更に彼の偉大性は彼の構想と論点が如何に大きくて現実的と実践的であつたこと、そして彼が堂々たる国際人として

小児科 平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇 電話 戎 一六四三番

同舟近詠

隻手手帖 岐阜市 東野 大八

空つばの袖よその子がまたのぞき

長女ふと手の無い父をしげしげと

妻の手を借りて 茶漬けの味となり

溝場拍手われ異端者に非ざりき

暴力の座に居合わせてお茶の味

ガンヂーの気持がわかる 日の寂し

父ちやんと抱かれにきたが 末つ子よ

もう腕で抱いて欲しがる妻もまた

金沢市 安川久留美

雑草の土をこぼした瀬の早さ

一人の子足をのばした足の裏

偽りの愛もあるらし孫を伴れ

夕方は一萬千里の蟻もいる

松山市 前田伍健

資本家に言わすと税とストで死ぬ

征服は假金名善山岳部

だます手は魚巢へ鯛とたこも来い

それ見たか程度の怪我で子の火花

長野県 高峰柳兒

仮縫いが目立つ夏瘦いたわれ

スト騒ぎ社長二号に励まされ

握手繰返し妓も酔つて居る

の視野と観点に立つていたという
ことであります。

其の頃の事でありますが彼を次
期大統領候補として出馬さす猛運

動が活潑化しました。然し此の間
題は遂に最後の段階に於いて不成

功に終りましたが其の当時の彼は
白亜館に自由に入しハローミス

タイプレセデントと一国の元首と
気軽に握手と歓談を交えて居りま

した。煙草を喫わない彼は何時も
ガムを噛んで居りました。そして

彼は自分の貧しい生い立ちを寸時
も忘れずカウボーイが使用する縁

の広い大きな帽子を常に愛用して
居りました。

居りました。

居りました。

居りました。

居りました。

想えば無名のカウボーイから今
日の名声と社会的地位を獲り得た
ということは何んという奇しき人
間の運命だろるかとは彼は必々とし
ました。そして人間は総て運命の
子なりと自問自答して感慨無量で
ありました。運命に従う人の心は
平和であり、運命に叛らう人の心
は鬼となる、されど人間の一切は
死に依つて解決する、天才児ロジ
ヤースも亦人の子として其の一切
を解決する時が来ました。アラス
カ講演旅行に彼が搭乘した複葉式
飛行機はアラスカの大原始林の真
唯中に不幸墜落し乗員全部機と運
命を共にし風雲児ロジヤースも亦
奇しき運命の子となして異彩赫々波
瀾極まる其の華かな生涯の幕を閉
じたのであります。

有限なる肉体は朽ちるとも無限
なる魂は亡びず、今彼の生れ故郷
にはアメリカの国家的記念保存物
と指定された彼の銅像とロジヤ
ース公園及びロジヤース図書館はア
メリカが世界に誇る民主主義アメ
リカの表徴として燦然と其の光彩
を放つて居ります。

日本の今日の急務は国際人の養
成でありましよう、過去に於いて
日本人が国際人としての尊称を奉
らなうために欧米人の模倣のみ
に奔走しました。ことに大なる過失
がありました。日本が真の堂々
たる国際人となるためには日本の
古い伝統に還り日本民族特有の個
性美と特徴を発揮する日本人らし
い日本人になることで有りましよ
う。

日本民族が建国以來二千六百年
の長い間一致固結と平和的に生活

出来ましたことは日本民族特有の
個性美と其の特徴として打算的で
なく、そして功利的でない義理人
情の温い心と心の固き結びに依つ
た賜物でありましよう。

英国の生んだ世界的大文豪H.
G. Wellsは其の著書世界歴
史大系の中で次の如く述べて居り
ます。日本は過去約一世紀に亘り
世界から随分沢山なものを受けて
居るのに対し極く僅かなものしか
与えて居ないと申して居ります。
今日日本が世界に与えるものは
多々ありましよう。然し其の中に

柳界展望

(其二)

▼川維弓削支部九月例会は、四
日弓削町金光教会で開催九月町
長杯は黒田久米友氏が獲得▼松
江川柳社八月例会は二十三日夜、
寺町竜覚寺で開催▼佐賀番傘十
周年記念九州川柳大会は十月
十七日午前十時から佐賀市願正
寺で開催される▼川柳鼓句会は、
八月廿五日大阪市阿倍野区西光寺
で開催▼不二田一三夫氏(大阪
市)は、七月十三日歌舞伎座六階
関西芸能クラブで、関西芸能人の
「小咄を作る会」に出席された由
▼成竹登茂男氏(金沢市)は、染
色図案工芸家として、文、日展に
十五回入選、各種展覧会出品製
作で多忙の傍ら、尙作句され、柳
人としてNHKの公開放送北陸三
県川柳くらば選手としても出場さ
れているとのこと▼三井造船句会

於いて最も重要なものゝ一つに
日本民族の伝統的特質たる温い義
理、人情の精神こそ人種、国境、
宗教の差別という大障壁を越えて
日本は世界に数多くの良き友をつ
くり、更に日本は世界から深き信
頼と愛される国になることに依つ
て民主日本の生命線即ち国際貿易
及び移民問題も自然的に解決する
に至るでありましよう。
義理人情の文学川柳更に世界各
国人に共通性を持つ笑いの文学川
柳、そこに川柳の世界性及び其の
発展性が有るのであります。

(玉野市)は八月廿五日夜三友ク
ラブで開催▼川維出雲支部出雲川
柳会は「遙山亭杯」を設定、毎月
カップ争奪句会開催。尼祿之助主
宰の下に、竹原雲平氏が毎月会報
収録等担当されること、活躍を
期待する▼石居高志氏(大阪市)
は、八月十三日勤務先の永楽輪業
K.K.東京本社へ復帰、東京都杉
区西高井戸一八三へ住居せられ
た▼小倉へち氏(神戸市)は、
半歳の闘病全快、此程勤務されて
いるが傍ら、目下斗病録編集集中と
の事全快をお慶び申し上げる▼川上
日車氏(滋賀県)は、八月初より
友人の好意により、その山荘へ避
暑の処二十五日帰宅本社へ「汝も
また蘭を好むや鯨鯨」初秋の葉
餌魚魚の指細く」の句を寄せられ
た。(摩)



一路集

散步

吉田水車選

娘の散歩親がハラ／＼する化粧 無茶
 手を組んで二人は若い散歩道 五茶
 かこつた散歩で二人顔が会い 黒天子
 散歩までに進んでるとは親知らず 秋香
 飲むあてがある日の散歩一人出る 光男
 散歩する妻はウインドばかり見て 十悟
 街録へ散歩の足もとめられる 泰三
 農夫から時間聞かれる散歩道 夢介
 農繁期散歩するにも気兼ねをし 同
 散歩からかえれば借金取が待ち 風の子
 呼ぶて置いて社長は散歩なり 木魚
 散歩ですと言つた女のハイヒール 満秋
 本当の散歩へ子供ついで来ず 水堂
 散歩にも母が附添う年となり 葉百々

散歩した頃がよかつた日記帖 雄声
 新妻と散歩の足も揃うなり 伊津志
 気楽さは一人散歩の狭い道 いわを
 黙礼がつい声となる散歩 九呂平
 未亡人たゞの散歩を疑われ 志賀夫
 散歩するアベツ景色眼に入らず 水里
 直ぐ帰えるつもりの散歩ナイトショウ 白馬
 ふところの具合で散歩コース替え 柳叟
 それからと散歩の先を母は聞く 木里
 けつたいなごえ散歩は出てしまひ 圭三
 ワン／＼の散歩に人の守が付き 白馬
 散歩またまつち忘れた浴衣がけ 寿利庵
 今日も亦逢えるか知らと散歩する 翠露
 散歩道都計もこゝで行き詰り 八ツ茶
 大切に散歩の土産初登 花団子
 恋人のように白衣と試歩の道 寛虚
 恢復の希望を強く朝の道 多久志
 屋上の散歩守衛にあやしまれ 賀峯
 停年になつて散歩の味を知り 望峯
 新調の浴衣散歩がつゞくなり 一朗
 散歩する靴音出勤とはちがい 恵二朗
 散歩道首導犬へ話しかけ 鮎美
 お互の気持をさぐつて居る散歩 不詳
 健康法ですと散歩をすゝめられ 和友
 砂浜の散歩は下駄をぬいで行き 清子
 散歩して二人いつやら唄つてた 一栄
 その昔字をかついだ散歩道 高志
 愛情を試すが如く散歩する 光郎
 ソロバンをばじいて居るか散歩する 光二
 独り来て肩身がせまい散歩道 凡九郎
 出張はぞろり銀座を散歩する 信子

散歩したまでは良かつた酒の事 芳嵐
 出養生子供が坂を押ししてくれ 一夜
 散歩道ひとの新築見てかえり 雲平
 看護婦を愛称で呼ぶ試歩の杖 正郎
 散歩許可空の青さを満喫し 同
 散歩ふと手形の期日思い出し 不二
 散歩などするひまはなし小商人 同
 散歩道豆腐屋一番先きに起き 良坊
 散歩道ネオンの方へ足が向き 同
 散歩と出る散歩は安い菜を買い 雨天
 圭三(佳)妻と出る散歩は安い菜を買い 雨天
 白馬(佳)結納もすんで気兼ねない散歩 水堂
 寿利庵(佳)思い出の散歩の橋を妻として 太路
 翠露(佳)逝つた子を想う芦屋の浜の道 牧人
 八ツ茶(佳)啞の子ら散歩の空は夕焼ける 正郎
 花団子(人)散歩した熱を婦長は知つて居り 一平
 寛虚(地)一二輪花の無心をする散歩 ひかる
 多久志(天)片肺は守り抜きたい試歩の道 芳仙
 賀峯(軸)三原山たゞの散歩と思われず 水車
 望峯(同)ニッポンの道には困る観光団 同

自惚れ

浜田久米雄選

自惚れの夢が大きい玉の興 井蛙
 自惚れを悔いるわたし月が照り 光郎
 自惚れを捨てて生き抜く腹をきめ 凡九郎
 鏡合が一はげごとに自惚らせ 九呂平
 自惚れる年でもない老夫婦 雪生
 自惚れが絹ハンカチで鼻をかみ 成詩
 自惚れは鏡の中で笑つてる 貴美
 自惚れのゆつくり吐いた煙草の輪 ひか平
 自惚れが過ぎて自嘲の腫が笑い トン坊
 自惚れて見てもつまらぬ給仕の身 ひでを
 自惚れが笑われている曲り角 雄声
 自惚れの鼻が満座の中折れ 十悟
 自惚れへ師匠が若く／＼見え 鮎美
 自惚れと自惚れ断じて振り向かず 恵二朗
 自惚れへ人事異動のつれ無うて 春日
 自惚れの強さを笑う立ち話 正郎
 自惚れに相槌打てばきりがなし 辰始
 自惚れへ相槌を打つ馬鹿らしさ 十九平
 (五)罪のない自惚れもよし春の宵 夜潮
 (同)謙遜をして自惚れをちらと見せ 高志
 (同)自惚れがとう／＼分裂症になり 千容
 (同)自惚れを忘れて特価品を撰る 雄々
 (同)自惚れは聞かされ酒はおごられ 夢介
 (人)自惚れの男の影の面白さ 伊津志
 (地)自惚れた女の鼻は空を向き 圭三
 (天)居酒屋でいう自惚れはたかが知れ 純男
 (軸)自惚れるようにこのごろ育てられ 久米雄

正誤

▼九月号 五頁上段四行目の句録は移ぎの誤り
 ▼八月号 一七頁上段二七行目の句類句のため抹消

いのちある句を創れ



投稿規定

用紙は原稿用紙、文字は正
確、開催月日及場所記入、締
切毎月二〇日、投稿先本社宛

本社八月句会 (大阪市)

八月七日 午後六時

於 光明寺

句三昧に暑さなしてある。大阪に居て
大阪の暑さを知らぬのはおそらく此作句
道場に集る人達だけであらう。古方氏の
句評は良き作句研究の資料であつた。例
によつてユーモア味ある路郎師の柳話の
後は次々と席題兼題の披露があつた。当
夜の不朽洞賞優勝カツプは西森花村氏が
把握した。閉会九時。(幹事)

出席者 路郎・夏乃・香林・一飄・望峯
春巢・ゆずる・一朝・京一樓・一平・三
平・木声・紫香・六竜子・翠露・水客・
いさむ・一三夫・南風郎・武助・十悟・
三男之介・葉光・静馬・明良・貞子・雅
巢・ひろし・梨花・久子・淡舟・恒明・
文蝶・凡九郎・賀峰・梅志・文秋・真一
秋窓・古方・赤子・生々庵・多久志・幽
王・梅里・白水・栗・三司・いわを・花
村・貴山・雄声・博也

兼題「愛人」 麻生路郎選
愛人へ立てよしやがとアインダー 六竜子
愛人へ落ちぶれたこと云いそはれ いさむ
愛人を情婦と呼んで刑事室 久子

愛人の手紙にあつた紅の跡 真一
愛人というのが孝行忘れさせ 梨花
裏切つた愛人がまだ胸に住み 久子
愛人を庇ひ課長の氣にいらす 木声
小説のように愛人ついてこそ 古方
愛人と歩けば街の灯はきれい 紫香
愛人の前で蔑む金のこと 栗
愛人が出来てそり／＼にやにやし 雅堂
愛人に殺す手だても教えられ 十悟
愛人にたのもしがられ遣い込み 文秋
愛人の腕は僕より太かりき 香林
愛人の言葉のはしも暖かく 栗
愛人の無口の程もたのもしく 同
愛人の買物みんな扱わされ 静馬
愛人のどこかに金の墓もあり 梅志
愛人の狭い日傘へ肩を入れ 京一樓
愛人の手前は高い方のにし 三男之介
鼻声になつて愛人うそをつき 幽王
愛人と出ればハイヤに乗りたがり ゆずる
金の無い点も愛人承知なり 花村
汚職からクローズアップした愛人 白水
愛人に見放されたかひげが伸び 雄声
愛人が居ますと件ぬけ／＼と 恒明
愛人の眠れぬ話じつと聞く 博也
未亡人となりし愛人美しき 紫香
愛人にもろうた詩集だけのこり 同
故あつて愛人のまま老けてゆき 生々庵
愛人は一般席から焼香し いさむ
愛人はうなるべく許り砂の道 栗
愛人の読んだ本を借りたがり 花村
愛人が帰るやソロバン又はじき 路郎
愛人におこるとおこりかえされる 同

兼題「愚痴」 黒川紫香選
愚痴一つ云わず五人の子を育て 梅里

地下足袋の舌打つ愚痴が今日も雨 京一樓
杯も冷えて互の愚痴となり 梨花
不景気の愚痴が浮いてしまふ風呂 六竜子
重役になつても妻には愚痴があり 多久志
おしまいは念仏となる母の愚痴 静馬
姑の愚痴戦前のことになり ゆずる
繁昌はしてゐるが丁稚の愚痴多く いさむ
女中今日ボチに言いたい愚痴あり ゆずる
母の愚痴娘はチヤチヤおかしがり しげお
へそ／＼が出来てすかり愚痴が止み 梅志
代筆へこま／＼愚痴を呑み込ませ 生々庵
愚痴もよしほど／＼の人間味 古方
アイロンをあてあて妻の愚痴をこ 栗
愚痴一つ言わない母を又欺し 十悟
妾宅は妾宅なりの愚痴を言ひ 一飄
愚痴言わぬ妻で素顔のまゝでいる ゆずる
憐れんでくれたも愚痴の多い人 秋窓
愚痴云い／＼も母はヘンクリ握らざる 南風郎
愚痴云われ妻で歌舞伎座まだ知す 幽王
愚痴一つ言わぬ男を尻に敷き 文蝶
酔うてかと思はぬ人に愚痴を聞き 秋窓
愚痴と云う形でママの見栄があり 生々庵
愚痴聞いて貰いに一晚泊りて来 水客
長生きをほめるも愚痴を聞かされる 春巢
日雇の愚痴を素直に聴いてやり 一平
旅馴れてかき屋の愚痴聞いてやり 水客
ぐち一つ云わない妻をけむたがり 梨花
呼びとめてからの女の長い愚痴 紫香

兼題「イヤリング」 長谷川三司選
イヤリング仕送りを待つ姉が居り しげお
これでもかイヤリング振つて見せ 翠露
世は末世へツブパンンイヤリング 栗
三人の母とは見えぬイヤリング 雅堂
父の名を知らず耳輪の派手な色 武助

イヤリング今宵ききれいな恋を知り 栗花
イヤリングあなた任せのカウター 文蝶
行く先は母だけ知つてるイヤリング いさむ
イヤリング似合いそなたが欲しがらす 静馬
はつきりと恋は恋ですイヤリング ゆずる
情熱の吐息に触れたイヤリング 明良
イヤリング世界へ向ける耳持たず 梨花
イヤリング本気な恋につき当り 久子
裏長屋さつそうと出るイヤリング 真一
イヤリングルームスイートへゆるるなり 紫香
イヤリング同級生に取りまかれ 淡舟
お見合へ恥しさうなイヤリング いさむ
イヤリング甘い囁き聞かされる 秋香
イヤリング今日の見合の席にゆれ 京一樓
囁きも受け流してゐるイヤリング 十悟
イヤリング男の嘘を見抜いてゐる 明良
お出掛けは腕輪に指輪イヤリング 三男之介
イヤリング変えてマダムの浮気する ゆずる
パツクミ運ちゃん氣にするイヤリング いさむ
甘つたるい電話聞いてゐるイヤリング 十悟
月蒼く耳の翡翠に謎を秘め 水客
アルバイトサロンにキザなイヤリング へとち
イヤリング握手のしなも堂に入り 香林
本心を云いそびれてゐるイヤリング 紫香
イヤリングはつして虫の声をきき 葉光
くちづけの角度で鳴つたイヤリング 古方
イヤリング家風に合わぬ事になり 赤子
どぶ板を鳴らして帰るイヤリング 京一樓
心中する迄ついていたイヤリング 一飄
氣に入つた養子がいないイヤリング しげお
イヤリング三面鏡は過去を秘め 三司

兼題「野心」 正本水客選
チンピラが大した野心持つてあり 京一樓
野心家と云はれ如才のなまじ世辞 淡舟

野心家へもう銀行がふりむかす
 野心をこさえまだ、野心有り
 親切を女の自信にことわられ
 三号も二号と同じ野心持ち
 素うどんを食べて野心の大きき
 三成は野心を首の座までもち
 野心の岐路歴史にのつただけ
 奥さん奥さんと野心家すくに馴れ
 野心家がしやべり始めたおそろし
 連れ添うて野心の無きに物足らず
 独酌の手に黙々と野心燃え
 警察でべらべら野心喋つて来
 女の野心はこれつぼつか小さい
 野心もつてみたかて僕は僕
 酒ぐらい呑めと野心を捨てた父
 野心ブス、僕の心で小さうなり
 養子まだ野心を捨てた訳でなし
 席題「涼み台」 小川恒明選

涼み台おせおせごんぼやつてゐる
 涼み台話上手が先づ坐り
 涼み台握りたい手がよく動き
 涼み台明日の手形を気にしつゝ
 席題「鍵」 後藤梅志選

吉報は鍵のかゝつた留守居なり
 気休めの鍵と知りつゝ持ち歩き
 共稼ぎ互の鍵を信じ合ひ
 鍵穴に鍵はそのまゝ気軽なり
 鍵かけて出た気楽さは妻の留守
 靴べらに鍵アケサラーの様に付け
 ドラ息子金庫の鍵を捜し出し
 貧乏なくせに鍵だけ大きくて
 合鍵を持つて帳場は氣を利かし
 鍵かゝつてゐる妾宅の風さがり
 言づけを云うておとなり鍵もれ
 鍵穴にまで新婚は氣をつかい
 隣りだけ知つてゐる鍵の隠し場所
 新婚の右も左も鍵をかけ
 遅刻して机の鍵も忘れて来
 鍵二つてれこに帰る共稼ぎ
 社長未だ戻るつもり鍵を置き
 鍵かけて二階で娘風寝する
 解決の鍵を握つてサタンめき
 トランクの鍵を忘れて日航機
 鍵を見に来た自転車も盗られ
 倉の鍵あたりにはびく音であき
 鍵東が無事に交響の朝となり
 落ちぶれたボケットにある鍵の東
 共稼ぎらしい財布の底の鍵
 裏門の鍵へ守衛は念を押し
 酔うてゐるのぢやなく鍵を見せ
 倉庫番鍵神棚にある安堵

川 阿倍野支部句会 (大阪市)
 六月十七日 於 西光寺 須崎豆秋報

先輩の手引きで椅子にそりがかり
 六十の手習手引読む夜更け
 手引しただけで先生と云つてくれ
 手引してくれと千円握らされ
 鼻息に仲裁役が腹を立て
 生きん為鼻息荒く旗も振り
 新市制鼻息荒いおらが村
 極道は親の鼻息見て戻り
 優勝馬鼻息百合の花のよう
 仲裁の鼻息喧嘩おさまらず
 鼻息の荒さは明日を考えず
 鼻息を伺いに来て飲んで去に
 朝日さす障子へ生きてゐる思い
 潮騒を聞く障子なりあけず飲み
 障子帖る旅館政変待つてゐる
 階上へ声かけて行く市場籠
 重役と一と拵違ふ僕の旅費
 立替えた旅費が忘れる頃にくれ
 満員のバスへ乗ろうとせぬ二人
 満員のひととこ雲の影が落ち
 満員の隅に旅情の人も居る
 共犯になるとは手引露知らず
 ばれてから女房鼻息荒くなり
 ランチアール皆ん乗せたい顔ばかり
 手引きされ奥の深さを一寸知り
 来た人へ障子閉めさす手内職
 学会誌四角い文字のある表紙
 階上へ万引も乗るエレベーター

川 淀川支部句会 (大阪市)

八月九日 於 香林居 武部香林報

青空のいつそまぶしい朝帰り
 ビルに区切られた青空しか知らず
 青空へ外貨を稼ぐ茶摘唄
 大もの役得楯が違ふなり
 世界の動き活字を拾ひながら知り
 幹事だけ残つたただの酒を呑み
 側近と書き立てられて得意がり
 側近に側近が居て手間がとれ
 煮え切らぬ訳は側近だけが知り
 側近は何時も手打ちになる覚悟
 側近に困まれ苦言など訊かず
 側近の進言通り答弁し
 側近と側近腹をさぐりあい
 新党の噂に側近あわてさせ
 記者団へ側近うまく言いのがれ
 雨上り蟹も散歩に来たらしい

川 梅田支部句会 (大阪市)
 八月二十六日 於 阪神ビル 水谷鮎美報

土用波派手な水着は見当らず
 生き別れ土用波をば見ていたり
 風休みこゝは涼しいビルの谷
 ニュオンの陽陰ではずむ無駄話
 倒産へ冷たく光るネオン街

川 出雲支部句会 (出雲市)
 於 図書館 尼 緑之助報

書見器へ手の役借りて読み続け
 足音もなく愛犬の膝に来る美好

淋しき腫よ悲しい過去を秘め 柳作
 坊や今日歩いたことの故郷便り 独仙
 あくせくと父の気性の歩きぶり 代仕男
 自衛への歩み世論が邪魔になり つとむ
 歩くだけ歩きましたが金詰り 岬月
 夫婦雑話いと綿密に読んでいる 梢鳥
 怪談へ祖母の入歯がちらついて 詩朗
 読書三昧など追放の身をかも 雲平
 怪談のうまい老人首を吊り 重信
 寝ろという雑話不眠音で閉じ 章坊
 だしぬけに笑つて怪談又怯え 縁之助
 女給等の読書南京豆の皮が散り 壮

川 鳥取支部句会 (鳥取市)

七月十日 於 いすゞ販売店 大西八歩報

子に花火強いらながら蚊に喰わ 陽月
 もう帰るうしろへ花火また上り 洪泉子
 サラリーは花火のよもや散り ひろし
 花火消えてもとの静かな月となり 湖山
 燃えて消え花火のそれに似た女 遊星
 夜の花火消えて旅愁を深くする 八歩
 しゆんです今日もお膳は鯛攻め 喬水
 弁当へ鯛いわしの日が続き 三歩
 すだから水其処へ打てあれ打て 日満
 水打てば土も心もよみがえり 八歩
 日本海汚職の船が浮いてくる 晩稲子
 海静かいくさの真似のフリゲート 日満
 十代の思慕は星とも瞬けり 穂波子
 星まわり又縁談にケチがつき 耕民
 星まつり仕立おろしの浴衣着て 八歩

川 備前支部句会 (岡山県)

六月十五日 於 やす子居

浜田久米雄報

鉤まで持つて大工の養子が来 柳風子
 風呂水をくんでいるのは養子なり 孝子
 俵給に説明がいる養子の身 次郎
 父ちゃん養子で今も小雨なり 節人
 コップ酒呑んで養子を忘れかけ 歌流児
 老らくの恋の相手は女子大出 細月
 女子大で産児調節よく学び さち子
 女子大を出ても手鍋といふ覚悟 正洲
 反目の二人が別の通勤車 久米雄
 散髪屋香水までもふつて呉れ 甘井子
 香水は瓶の形にほれて買ひ 与詩雄
 初恋と言う名香水つけて見る やす子
 駐在所泣く迷い子をもてあまし 娘句楽
 臨月の下駄さぐりさぐりはき 東岸子

川 下関支部句会 (下関市)

八月七日 於 綾羅木海水浴場 石川侃澁洞報

身につけた術が用心棒で喰い 九呂平
 用心棒連れて大きな口を効き 四呂平
 靴一つ事務引継へ加えられ 戊理智
 用心棒特攻隊にいた自慢 同
 一軒家噂の種になる鬼火 土筆坊
 内幕は用心棒という書生 千里
 用心棒些細なことに腕をみせ 呆鴨
 幸福に眠り鬼火も出ぬ墓場 藤四郎
 このまんま育つてほしい置土産 伊三男
 置土産淋しく日本の子に育て 侃澁洞
 用心棒昔のキズを自慢にし 鬼道
 散歩まで用心棒のいるお人 司楼
 用心棒のつもり二階へ下宿させ 蘇人
 用心棒プラカード程の肩の巾 かつら
 置土産に金魚を呉れて転任し 銀町

前科二犯と言う肩書の用心棒 柳慶

川 弓削支部句会 (岡山市)

八月七日 於 弓削駅長官舎 浜野奇童報

市になつてまだ特急は通り抜け 青山
 特急で逃げた犯人飛機で追い 湖月
 ホネムーンたつた一度の特急車 一貫
 特急の通過の風を涼しがり 流風
 特急へ避暑の二号は派手に乗り 風樹
 特急の中でウナ電読みなおし 紫陽
 特急は稲田に風を残しとき すみを
 特急に交えた途端に出る電話 竹影
 特急で飯かきこんで乗り遅れ 七面山
 ウナ電に今日特急のもどかしく 三平
 特急の電話要件だけで切り 笑年
 特急は故郷の駅で窓を開け 古心
 週末を芦屋へ急ぐ特急車 牛歩
 球団の旅特急でつかれきり 呑天
 特急の一等ただの客も乗せ 秋波
 特急で来て焼香がピリになり 巷雨
 どの椅子も庶民ではない特急車 奇童
 特急の見送り派手な声ばかり 游子
 特急で来て普通車で見送られ 笑泉
 口止めへ男になつた腹をきめ 文郎
 口止めをされて無口は腹を立て 柴舟
 口止めを種に度々言いやられ 弓削平
 口止めがあるほど粋な行状記 百郎
 口止めへ凄いい文句が並べられ 秋
 かくれんぼ母へ口止してかくれ 鉄児
 夏休み朝寝のくせがつかうだけ 血水
 今日だけになつてせわしい夏休 正平
 腕白も遊びにあいた夏休 銀糸
 竹葉

品質優良
タチカワペン先
 TACHIKAWA PEN
 大阪府東区豊後町四八
 立川商事株式会社

タチカワペン先
 タチカワ
 タチカワ
 タチカワ

夏休四帖ずりに六人寝 麗雨
 夏休避暑をかねての墓参なり 花子
 集配の父にすまない夏休 富至
 でためめ我が覚よりは拍手され 明峯
 アルバムのここから松葉杖になり 巷雨
 運命に負けまいとする松葉杖 久米女

京都支部句会 (京都市)
 七月十日 於 親生居 大鶴喜由報

濡れた手に受けた葉書の字にじみ 恒次郎
 洗濯の濡手へ妻の気性見せ 親生
 とうふやの濡手へささや軽のくろり 憲一郎
 水遊び濡手はおやつおあずけよ 九角
 濡れた手の釣銭にうろこがこぼりつき 龜一
 豆ふやのぬれ手に札を渡しかね 加代
 濡れた手で子供の熱を案じてる 絵丘
 背の子へうさぎの湯気がよみよみ来る よしろ
 背うた子を思はず起したはるる灯 秀徒

背の子を囹のようになげす、蘇海
背の子をあやして妻は病んでる 正男
親の汗子の汗背の子も裸 鳥雀
花電車背の子は深き眠りにて 晴芽
背の子の帽子歪んだまゝ寝てる 千潮
背の子も悲しき話さらいなりに 蛙足

川 大聖寺支部句会 (石川県)

八月七日

於 光郎居 野村味平報

町長の始球(ヘツピリ)腰でなげ 久雄
町長も飲めば負けない咽喉自慢 とよ
虫干会国宝級のものもあり 醉羊
波田扇老婆の顔もそんな色 卓風
水着にも同じ好みのテンエイシャ 武富
むき出しの肌もたのもし小麦色 味平
特級酒もらつて欄は手を借りず 光郎
蜜豆に恋の若さがありあまり 素百々
長話うちわで隠す大欠伸 桃園

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

八月十五日

於 南中学校 田垣方大報

プレゼント量の大きなのを選び 万古
標札の前で中元持直し 星光
この程度ならと汚職をふりかき 千容
贈物くさらぬ内に次へ行き 閑人
贈物割勘らしい名が並び 春也
戴いた足袋が一文大きすぎ 風の子
煩悶の背中叩いてマダム酌ぎ 可笑
煩悶へ日記白紙の日が続き 一善
煩悶の過去に消せない夢があり 桂月
煩悶へ神父の愛の報われず 春日
体裁を親捨てきれず示談にし 一念

落語家は客が笑う間息を入れ 加志子
体験も混ぜて新作笑わせる 天風
柳橋が高座で見せるそばの味 聴牌
帰る朝名残のなきさ踏む素足 一哲
一日の疲れ素足がくつろがせ 正司
素足にも自信あります八等身 井泉
地下足袋のあととはつきり夕涼み 白楊
若い氣の妻も素足になる芝生 谷水
いさかいの素足気になる汽車の音 斜木
近頃の猫はネズミの番もせず 越鳥
炎天に福上出来と父風寝 明心
炎天を帰れば西瓜待つて居り やよい
裸体美を見せて泳げぬ娘の日傘 舟水
引揚の裸といつて戯にやり 愁水
これ以上脱げん裸をもてあまし 千代春
来客へ裸少々暇が入り 桂月

川 赤坂支部句会 (岡山県)

八月三十日

於 大介居 政田大介報

ウインクを横で見たのが氣を使い 芳流
ウインクをされてタイプはミス打ち S.K
彼女だけ解るウインクして別れ 素人
予防などせず不作を並べたて 春仙
不用意な言葉へ予防線張られ 雨水
病虫書飛行機飛ばすまで進み 美由
予防にもなると新薬進められ 苔石
予防薬信じて酒を又はじめ 花蜂
名優の素顔朝顔愛でて侍ち 宇柳
失業に沈む親父の肩をもみ 佳目夫
アルバイトお金の価値がさぞ知れ 馬洗
アルバイト親の姑券にささぎれ 坂山
バイトしたモデルが墮ちるもさなり 大介
アルバイトお客に馴れて夏がする 三四詩

川 篠山支部句会 (兵庫県)

八月七日

小西無鬼報

アルバイト犬のお供で歩かされ 水呑
長客へネジのもとけた時計鳴り 玉露
飛び入りの客へ一皿つまみ分け 兼比羅
未亡人男の客へ遠く座し 鉄児
客筋を落して店を持ちこたえ 直人
秋風にふと誘われる試歩の道 清子
百姓へまだ心配な風の事 冬雨
愛の巢へデフレの風がまこもり来 青果
野党また一荒れ起す風模様 笑陽

川 宇部支部句会 (宇部市)

八月八日

於 東岐波村役場 国弘半休報

亡き父の汗を話題の盆供養 呆鴨
耐乏の汗を流せと総理云う 万盛
布代を上廻つてる仕立賃 正夢
未亡人ニューデザインで噂まき 風柳
婦人服一年増しに肌を出し 満盛
ツウピースタイトが画く曲線美 青水
めでたい日姪婦服から人にもれ 勝人

川 貴生川支部句会 (滋賀県)

六月五日

於 夢生居 貴瀬美秋報

放射能の雨へさからう氣の若さ 美秋
内職の耳へツヨイヨイが聞えて来 夢生
内職のへそくり迄を娘にとられ 俊子
内職の妻へ蚊やりをたいてやり 凡骨
貸切りの氣やすさバスの酒さなり 斗志
貸切りで行きまねんと母達者 春菓
貸切車ですと車掌のそつけなし 紅月
貸切の中で上手なのど自慢 綾子
もう一人おらんやないか貸切車 調月
都会まで行けばギョルに相場立ち 木人

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第四十四回)を募る
兼題「副業」 路郎先生選
締切・十月十五日 句数五句以内
発表・十月二十一日(店内掲示)
投句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

川 大原支部句会 (岡山県)

七月十日 於 十坊居

本田惠二朗報

はきくく答える子らに押さるる 喜美女
 てきはきと答えてへッパン振り ゆたか
 答案も見ずスボーツマンは引き抜かれ 秋芳
 考えさせてとプロボリス軽く逃げ 惠二朗
 アブレの娘ノ一と答えたはのこ 坊太郎
 大つびらで故郷へ飾る借衣裳 野川
 女中もう主人の子ですははからず 真
 酒ぐせを知つてるマダム目で合図 いく女
 むねむりへ出番出番と指が突き 米花
 どう合図間違えたのか親爺が出 弦児
 エラーしてからの合図はじき聞き 無考
 口笛の合図へバフの手を止める 凡平
 鈍感へ合図思わず声になり 青美

川 玉造支部句会 (大阪市)

六月十九日 於 白柳子居

清水白柳子報

電車待ち傘のしぐで文字を書き 清子
 さよならとそよま友に貸した傘 透水
 こりたのかまろて傘を持つて行き 草白
 ささねば濡れる自転車かごめられ 一栄
 破れ傘もらぬ所をよつて差し 甚也
 傘の雨坊や廻して人にかかけ 一正
 うちの僕雨傘解割してかえり 登志子
 雨上り小川の目高傘で追い 操
 梅雨の空傘持つてゆくらに押問答 朝路
 金魚にも傘をかしたい放射能 章子
 今日晴アバートの窓に傘が咲き たもつ
 雨の日は傘で争う学校行き 順甫

川 木次支部句会 (島根県)

八月六日 於 純雷居

藤井明朗報

嬌声に二次会どつと廻れ右 明朗
 浜で飲むビール高いこと高いこと 緋文字
 久し振り逢つた女は二人連 綾美
 久し振り駒を持ち出す涼み台 駄句案
 育たぬを承知の金魚又も買ひ 清夢
 此庭へ金魚の池も造りたし 明暗
 ビール満喫瀑下にありて杜用族 迷調子

川 布哇支部句会 (ハワイ)

古川麗花麗報

良心に耻ぢず出世もせず老い 柳慶
 良心に耻ぢぬ儲の小さいこと 草一郎
 良心は留守居の妻へ土産物 閻魔王
 人の世の起伏良心すりへらし 陽炎
 良心のユースに邪魔なお附合 笑有
 お位牌に済まぬ祝が一つ増え 雅一
 良心に耻ぢない仕事損ばかり 保枝女
 良心へ帰れば恋しき増すばかり 譲治
 人の道説いて行伴わず 意快陽
 良心に思はぬ事は口をとじ 周防
 良心の青黄に悩む恋に負け 泉水

川 浜寺病院支部句会 (大阪府)

七月十五日

贈所新三報

共稼ぎマンデー妻の洗濯日 歌爾
 洗濯を夜なべにされて落ちつて 橋村
 洗濯へしばし泣く子が放つこかれ 慢多朗
 来客でまた洗濯をし損ない A.T公
 洗濯々々婆さんのサロンパス 溪泉
 洗濯のぬれ手でババの靴揃え 早苗
 洗濯へ杜宅は水を譲り合ひ 文糖
 真似だけの盃で病む誕生日 鬼酔
 何時からか母は忘れた誕生日 雅方
 誕生日月給前ではつとかれ 楽天
 朝酒もゆるしてくれる誕生日 南風
 洗濯の毛布男の力借り 白蘭

川 柳白鷺句会 (大阪市)

榎南夏六報

愛憎を越えて来た日々鬮魚の美 彦六
 ひと跳にすでに怒つて居る鬮魚 吟月
 病室の夜へ鬮魚が美しい おさむ
 あざやかな色の悲しく鬮魚燃ゆ 一草
 パラソルの影で鬮魚が動かない 二桂
 あゝ美し愛は死をこえて生く どり
 あゝ恋人が消えて

明和川柳青蛙句会 (西宮市)

あゝそれはと妻の目に惚て 雄歩
 此の奥に質屋真赤なカンナ咲く 翻骨
 校庭にひつそりかんとカンナ咲く 雄歩
 カンナ咲く蟻忙しき列作る 夏六

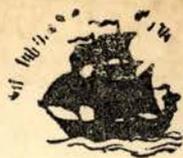
トイレットのぞいた蠅が膳の上 喜朗
 女工さん仕事終ればニユルツツ 春洋
 スクラムを組んで女工も負けていす 水里
 安静を又さまたげる蠅二匹 淡月
 浴衣着て髪もアツツの母若し 紫雲
 冗談の一つも言える怖復期 白馬
 すんまへんたからに蠅も食えまへん 成詩
 冗談で痛いところをさわられる 善坊
 蠅叩き手近へ置いてきれいい好き 牧人

葦川柳会 (島根県)

七月十日

於 島根療養所 広江天痴人報

若かりし父を老妓がほめちぎり 外樹
 一合ですぐ寝る父を皆たより 烏持
 入所費にふれず見舞の父の讒 純白
 体温計はつとした眼でしまわる 鶏太郎
 父と子が仲よく向う将棋板 春坊
 父の讒いくつか僕がよせたのだ 古刀
 アルバムに父は笑顔を置いて逝き さつき
 野良仕事の父へ手を振りパスケー 用心坊
 亡き父の形見の単衣試歩に着る 三馬
 母の掌の体温計はどの正確さ かつし
 上らないのも気にかかる体温計 けん坊
 外気舎へ出て暇になる体温計 真作夫



公 雑 記

★招かざる客、台風十二号が来る
と云うので、大阪も防備で大騒ぎ
したが、風は十五メートルそこそ
こ、いつの間にか青空が見えだ
してケリ。そうすると、九州や四
国では多少被害があつたのではな
いかと柳人のことを案じている。
★久しぶりに山雨楼が「思想句の
研究」を書いてくれた。病臥して
いても相変らずの健筆をよるこ
と。★久しぶり党に阿達教授の
「独立体川柳点について」があ
る。御愛読が願いたい。本号も亦
原稿がフクソウした。従つて私の

不 朽 洞

▼戸倉普天氏
(兵庫県)は
九月六日朝、
六甲に登り、

知人の別荘に宿泊。「朝酒にと残
した分も減つて居る」の句信を寄
せられた。▼中島生々庵氏(大阪
市)は八月二十二日、堺市浜寺歌
訪の森の同氏邸で杏林川柳会員夏
季吟行川柳会を開催、午前十時か
らモーターボート、海水浴、川柳
演習、句宴等多彩の企画を繰込

山原鉄道管理局長からその会に對
し、感謝状に金一封授与せられ
るので、代表として、久米南町役
場伝達式に臨み金一封を受領され
た。なお、卅日NHK岡山ローカ
ル放送に「農村川柳」を楽しむ人
々へ、川柳角力吟をまじえて放送
された由。▼直原七面山氏(岡山
県)は弓削川柳社が、今回岡山県
社会教育課から文化団体として推
薦されたので、その代表として、
ラジオ山陽から同社の運営、其他
について八月廿八日放送された。
▼浜田久米雄氏(岡山県)は、八
月二十八日日本社へ来訪、路郎主幹
と懇談。近く岡山県下川柳家句集
「吉備団子」第六号上梓につき、
師の序文、題字筆を依頼夕刻帰
郷せられた。尼緑之助氏(出雲市)
は、八月廿四日食糧事務所出張支
部の川柳を主体にした慰安会に、
神西湖へ招待、参加された。▼高
鷲亞純氏(大阪市)は八月廿六
日、尾道今治間結船の停泊時を
利し、今治市の長野文庫氏を訪
問、細談に時を移された。▼楳原
一善氏(倉敷市)は、九月号本誌
に依り、初めて川柳まつり特別課
題「誕生」の第一席優勝を知り、
二説三説、榮与の優勝権が、新進
支部倉敷に飾られると思ひ、嬉の
ため其夜は、夜半迄寝つかれな
つたとの事。なお柳誌を見て谷水、
方大両氏始め、多效来訪、大阪
の豆萩氏等の各所からの祝状に

「新川柳鑑賞」の続稿の掲載も沙
時を見ることとした。★踊る阿呆
に見る阿呆」の稿は数人の寄せ書
きなので一寸重複したところもあ
るが、そこが阿波踊らしいとも云
えよう。いろ／＼お世話下さつた
毎日新聞や関西汽船の方々や、な
み／＼ならぬ配慮を煩わした徳島
大学の飯田博士に謝意を表する。
★電話の開通をお知らせしてお
く。電話と云えば、その昔、久留
美君が、一パイきげんで金沢から
夜の夜中に電話をかけて来て、風
邪をひいてる僕を電話へ釘づけに
したことを思い出す。この頃はも
うそんな元氣もあるまいから安心
していいかも知れない。住吉の
六〇八一番である。毎日新聞がニ
ユースとして報じて呉れた。貧乏
詩人に電話が開通したのでピツク
リしたのかも知れない。阿々(略)

み、清遊の川柳会を開催された。
▼路郎師は八月廿八日、小倉へと
ち氏の勤務されている西区阿波
座の永瑞行の席設に招かれ、そこ
う北隣東天閣で、「金儲と人生」
と題し、柳話され会同者に多大の
感銘を与えられた。なお、同師は九
月十八日岡山県山陽新聞社へ出張
「川柳のれん」の執筆等につき談
合された。▼福島鉄児氏(岡山県)
は八月三十日、句碑建設、旅客サ
ービスに協力した理由により、岡

「筆不精こんな時にはちとこま
り」と嬉しい悲鳴を挙げていると
の事お慶び申上る。▼浜野奇童氏
(岡山県)の消息に依ると、県教
組機関紙「きび」に川柳欄を設け
られる由。▼服部十九平氏(岡山
市)は、八月十二、十四両日NH
Kのローカルで「終戦秘話」を放
送され、又八月十八日夜ラジオ山
陽で、久米雄、風来子、忠美の三
氏と共に「川柳夏の夜話」を放送
された。なお服部十九平氏は岡山
市の岡山労働基準協会の委嘱に依
り本年の安全週間行事として「安
全川柳」の選句をされた。▼河村
日満氏(鳥取市)は鳥取放送局か
ら九月四日放送された。▼吉田水
車氏(布施市)は仕事の都合上当
分、名古屋市千種区観月町一の二
二に住居されるとのこと。▼丸尾
潮花氏(大阪市)は其後病氣御全
快の由今後共益々編集に活躍を期
待する。▼不朽洞会員の消息は細
大瀾らさず知りたい。土地の遠近
を問わず本会宛に御消息の程をお
願ひする。(摩)

新 会 員 紹 介

八 月

安 原 斜 木 (倉敷市) 正
千谷氏推薦

九 月

西 川 恵 風 (和歌山市) 正
方正氏推薦

募 集

課題吟募集

商人 (廿句) 西尾 葉選

舌 (廿句) 新川 博也選

新 婚 (廿句) 尼 緑之助選

頭 数 (廿句) 木下 幽玉選

毎号募集

近作柳樽(雑詠廿句) 麻生路郎選
川 柳 塔 (雜 詠) 麻生路郎選
文章・評論・研究・感想其他

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住
所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟
を募る。
▲「課題吟」は何人でも投句が出
来る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会
員に限る。

川 柳 雑 誌

第九卷 第十号

定価 四〇〇円

(送料四円)

半ヶ年 二六四円

一ヶ年 五二八円

昭和廿九年九月廿五日印刷

昭和廿九年十月一日発行

大阪市住吉區西四丁目二五番地

行刊部 麻生幸二郎

發行所 川柳雜誌社

電話住居部 六〇八一
電話日部 六六五〇

Printed in Japan

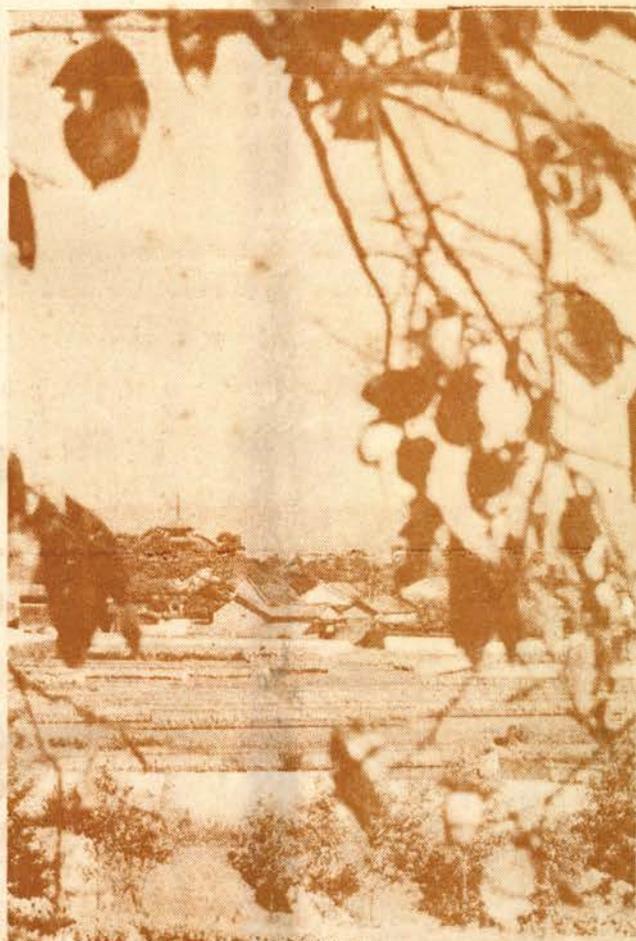
行野日一月十年九廿初第 本誌創刊日五廿月九年九廿初第 (行野日一回一月毎) 可認特准郵種三第日一月七年二廿初第

THE SENRYU ZASSHI

NO. 329

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

戯れに
ついても
淋し
鐘の
巾
井
郎



大阪・名古屋・伊勢・奈良・吉野を結ぶ近畿の大動脈
吟詠のご旅行には風物のすぐれた近鉄沿線へ……

近鉄観光案内所 上六①1970・アベノ②7020・河日産③77.3・波屋橋④8861

近畿日本鉄道

大和百寺の案内書進呈 本社 大阪市天王寺区上本町六丁目一番地

円四料送 圓拾四價定 誌雜柳川 號九二三第